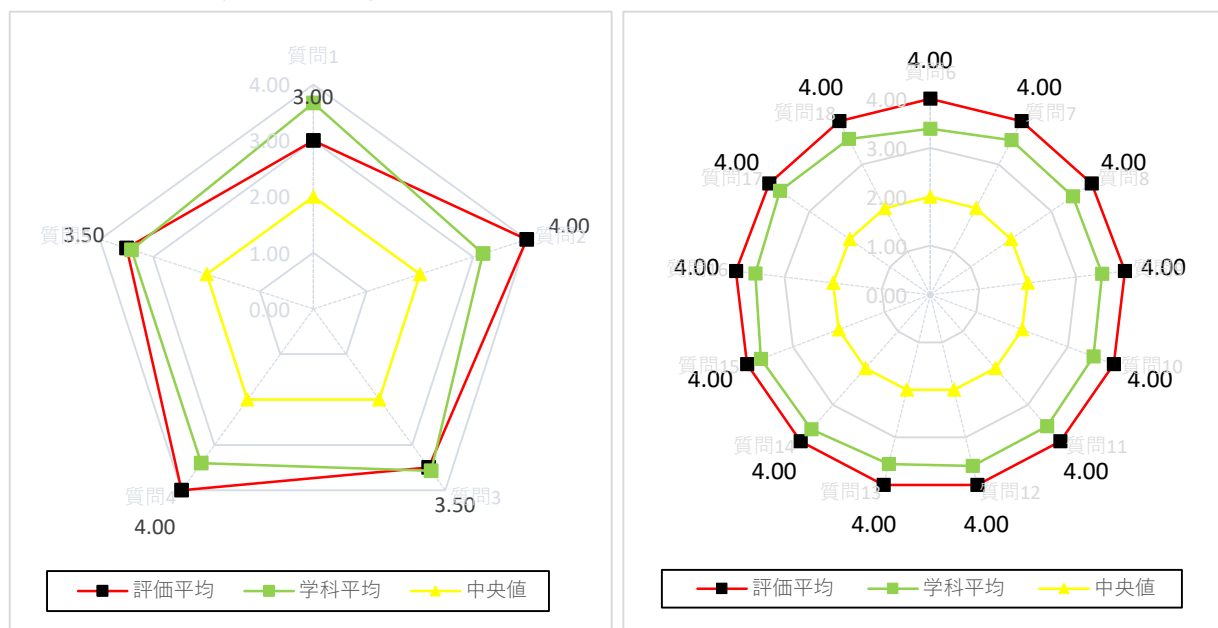


学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		あすなろう I 基礎 (初 年次教育含)	6名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

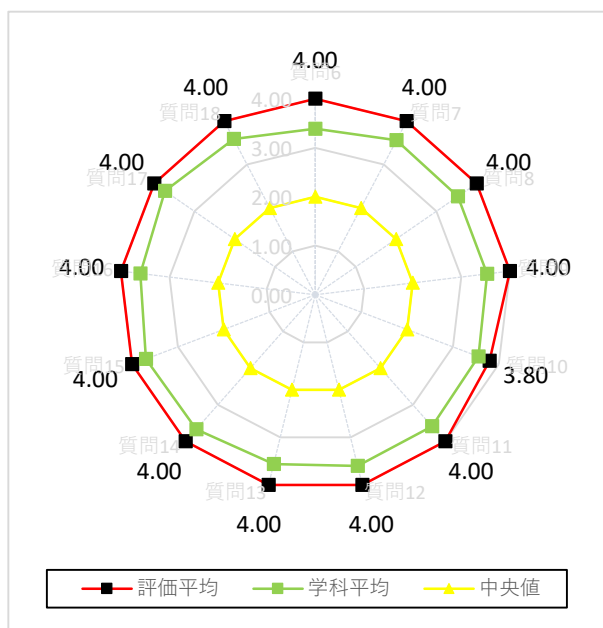
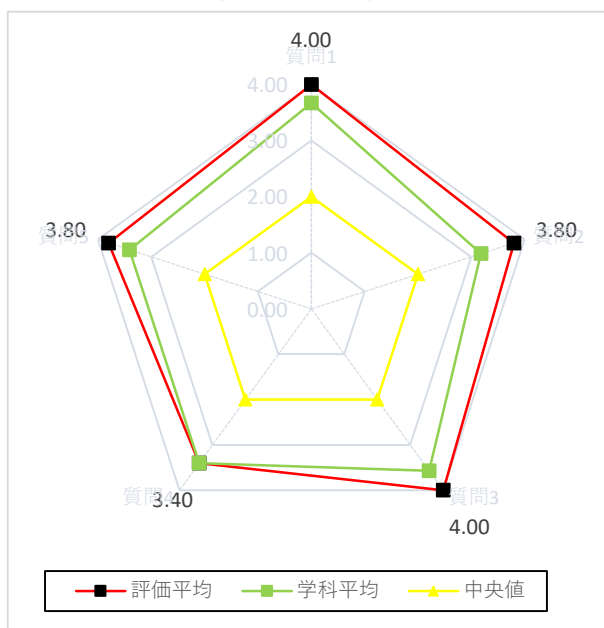
この科目は初年次学生が今までの生活から大学生活へと円滑に移行でき、社会人基礎力を獲得し医療人として立ち居振る舞いを身に付けることができることをねらいとしている。学生生活での学修方法を学び学士力育成の基礎固めをする機会ともしている。授業内容であるボランティアでは自主的に学べる機会を設けた。その中で社会人として大切なことに気が付き、必要であると自ら意識的に身に着けた能力もあった。例えばコミュニケーション力、報告・連絡・相談などがそれにあたる。また、グループワークを多く取り入れ、意見交換や考え方の共有ができる機会も提供している。このような学び方から得られた内容は、目指す看護専門職にも必要な能力であることに多くの学生が気づいていた。授業ではできるだけ自主性を養うことに努め、必要にあわせて助言も加え考える機会を提供していったが、この方法が学生の満足度にもつながっていることから継続的に授業方策として取り入れていきたいと考えている。

(3) 次年度に向けての取り組み

今年度はCovid-19の影響でボランティアの経験回数が少なかった。しかし、上記のような結果が出ており量ではなく質であることが明らかとなった。そこで限られた機会を有効に生かすためにも参加前に活動することの意味、行動において意識すること、行った後に得られることを参加前から考えるよう方向づけ、意識的に行動して多くの気づきが得られるように方向づけていきたいと考えている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		あすなろう I 基礎 (初年次教育含)	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

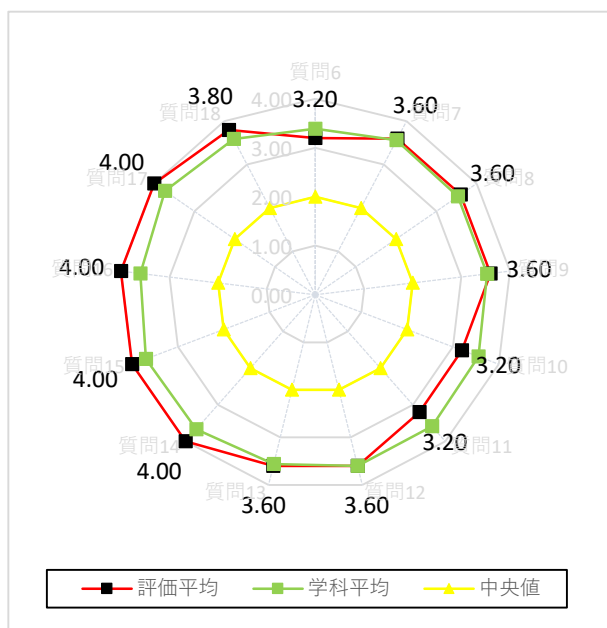
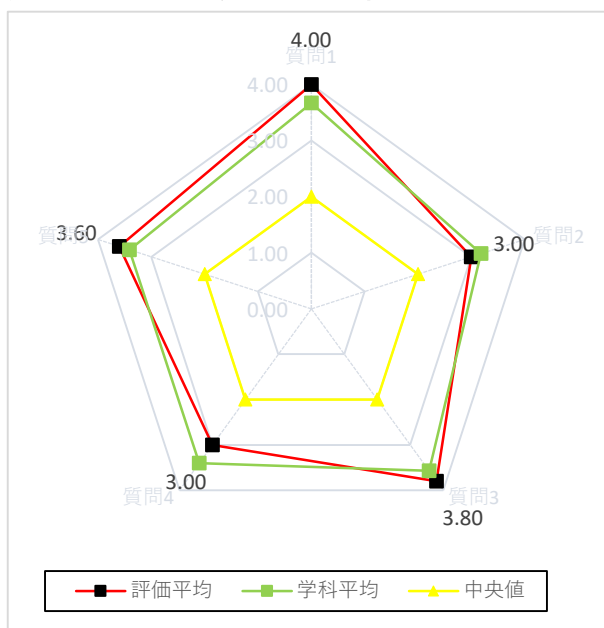
すべての目標において平均値以上の学生評価であった。一方方向性ではなく教員と学生の双方向のやりとりを行い、学生の質問等に真摯に対応した結果であると考えられる。

(3) 次年度に向けての取り組み

今後も、学生個々の特性を的確にとらえ、一人ひとりに丁寧に対応していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		あすなろう I 基礎 (初年次教育含)	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

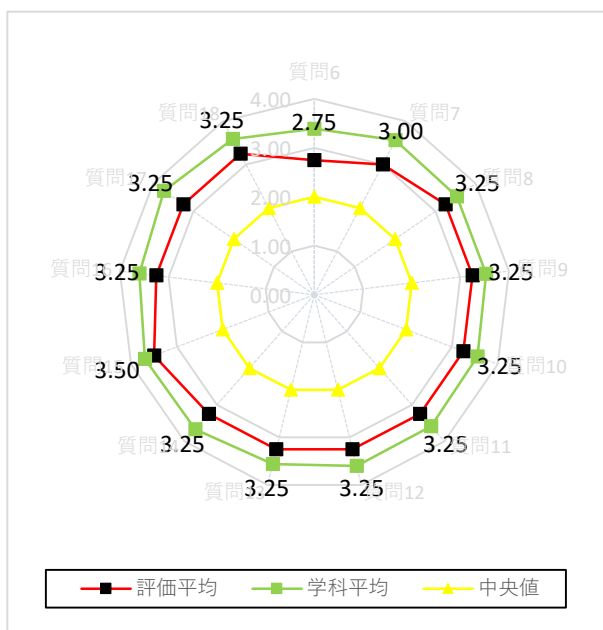
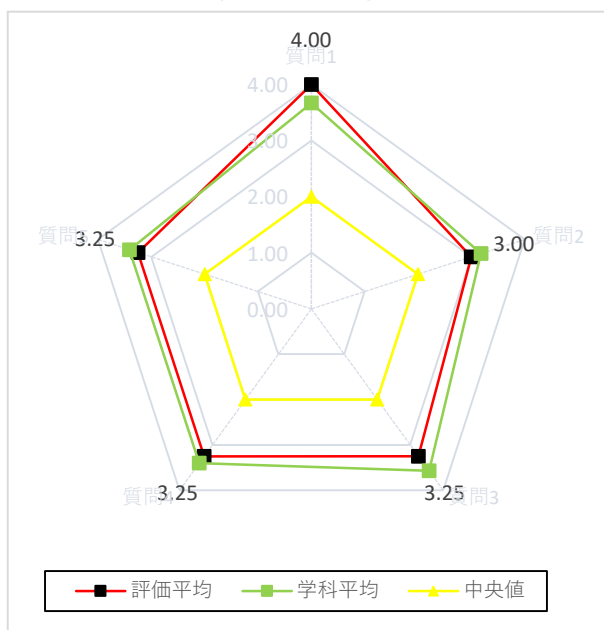
ボランティア活動に積極的に取り組み、主体的な活動ができていた。グループ間でのダイナミクスも充実していた。

(3) 次年度に向けての取り組み

教員を含めたチュートリアル回数が少なかったため、次年度は回数や方法を検討していく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		あすなろうⅠ 基礎（初年次教育含）	10名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

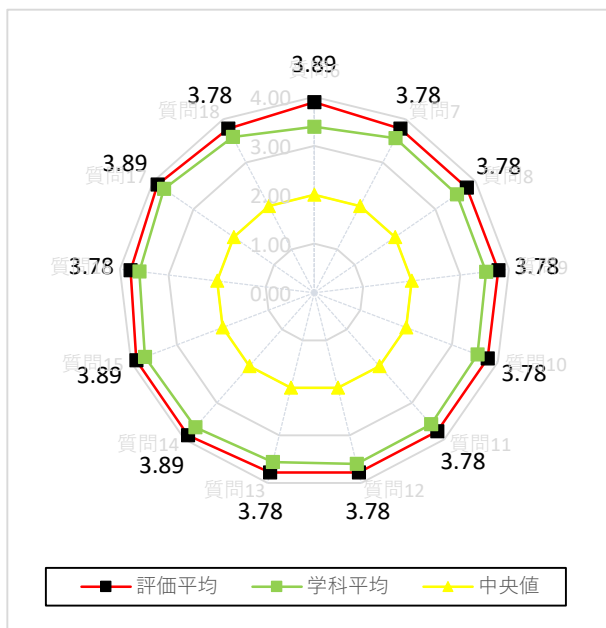
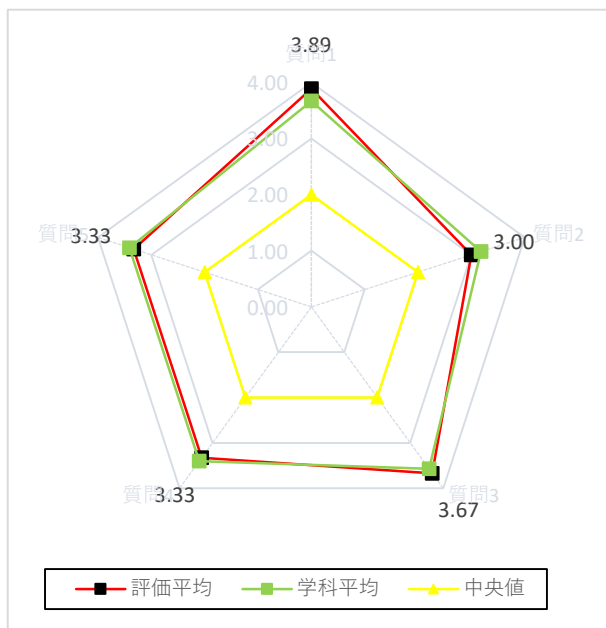
学科平均よりほぼ下回っている。理由として、初回に全体、グループごとに集まってシラバスの説明をしているが、その後コロナ禍により、グループでの活動はなく、全体の計画の変更があり、その都度、担当学生に対して改めて、説明することはなかった。ポータルサイト活用の説明や方法についても、中旬以降に3グループ合わせて行った状況であり、メンバーへの理解度の確認をしていない。少人数グループであるが、グループ活動での自主性、積極性、能動的に行えるように育む授業を段階的に行えていなかったことが原因である。また、履修者数10名となっているが、3名の教員で10名の学生が各々のメンバーで分かれている。その際、2名の教員の学生に対しては、2回ほど関わることができたが、一人ひとりに対する対応はしていない。評価者として該当するかは検討が必要である。

(3) 次年度に向けての取り組み

1年次の前期は、新生活で迷うことやわからないことも多いと推測する。密に関わっていないことを振り返り、対面以外で関わる工夫や学生の理解度の確認を行っていく。社会人基礎力を高めていけるように、グループWebオンライン、ディスカッションを行ない、様々な悩みやわからないことの解決策やボランティア活動についての意義など、グループ内での情報の共有ができる環境を作っていく。質問に対しても、他の学生とも共有しながら対応していく。評価者として、3名の教員が担当する学生を対象とする場合は、授業計画の見直しを行い、10名に公平に関われるような計画を立案していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		あすなろう I 基礎 (初年次教育含)	12名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

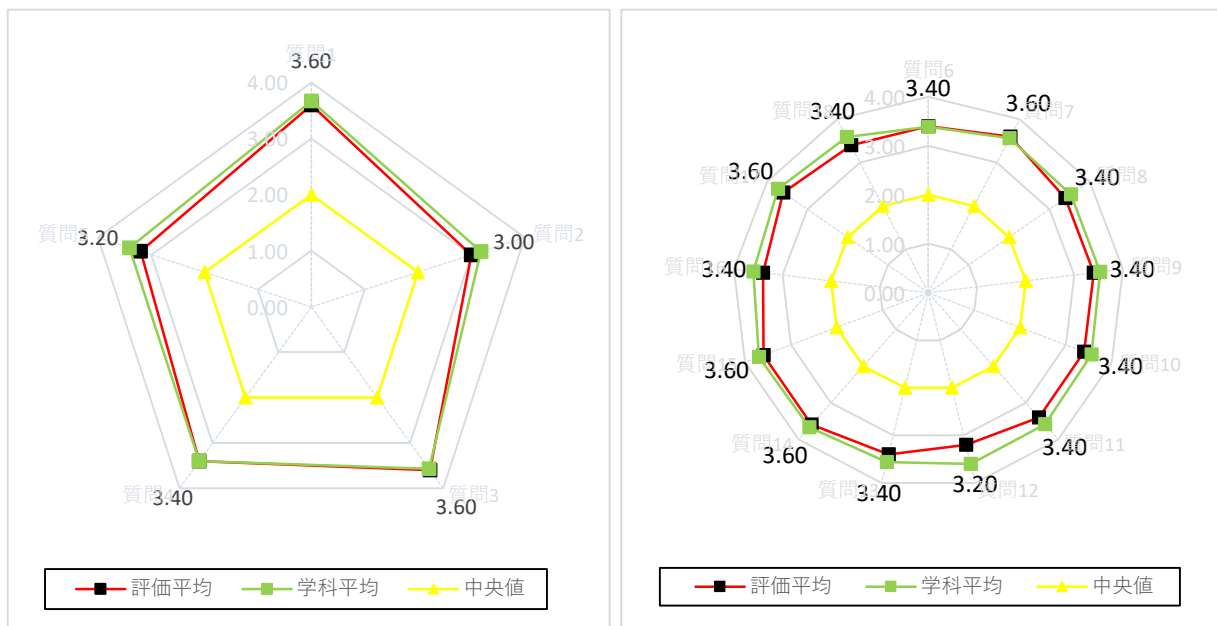
1年生が受ける「あすなろう I 基礎 (初年次教育含)」は、まず全体でガイダンスを聞いた後に学長講話を受けることから始まる。そして図書館オリエンテーションを3グループに分かれて受け、講義の受け方やノートの取り方、レポート作成などの講義や社会人基礎力の講座、BLS (一時救命処置) の講習と続き、最後に7月～8月のオープンキャンパスのボランティア活動で前期は終了した。コロナ禍で、3蜜を避け、感染予防に気を付けながら、様々な工夫をしながらたくさんの学修を行ったが、学生達は初めての大学生活の中で慣れない活動にも一生懸命取り組んでいたが、シラバスの活用は十分ではなかったようだ。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度カリキュラムの変更があり、「あすなろう I 基礎 (初年次教育含)」の内容は変更等があるかもしれないが、今年度実施した1年前期に学ぶ大切な講義や演習、ボランティア活動の体験は次年度も続くように願っている。また、ガイダンスの中で、シラバスの活用についてしっかり伝え、学修の向上も図っていききたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		あすなろう I 基礎 (初年次教育含)	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

結果と分析

担当学生への対応は3名の教員で行った。

前期では、学生自身のあすなろう授業の意味などをきちんと理解すること目標に実施し、チームとして協力や協調性を高めるよう実施してきた。

それぞれのレポート返却も個別的な支援につながるよう工夫を行ってきた。

後期は、授業や実習等で3名の教員不在をどのように調整して支援するかを工夫して行ってきた。しかし、教員との連携を取りながら支援していても

学生への十分な伝達できたか不明である。

結果として十分な支援が出来なかったのは、後期での関りが時間的に十分できなかったことも一つの課題と考える。

その評価がグラフが表していると思う。

今年度は、さらに担当教員が2名となり後期課題のクリアは学部内で課題提案をしているのでどの方法で行うか検討していきたいと考えている。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度に向けての取り組み

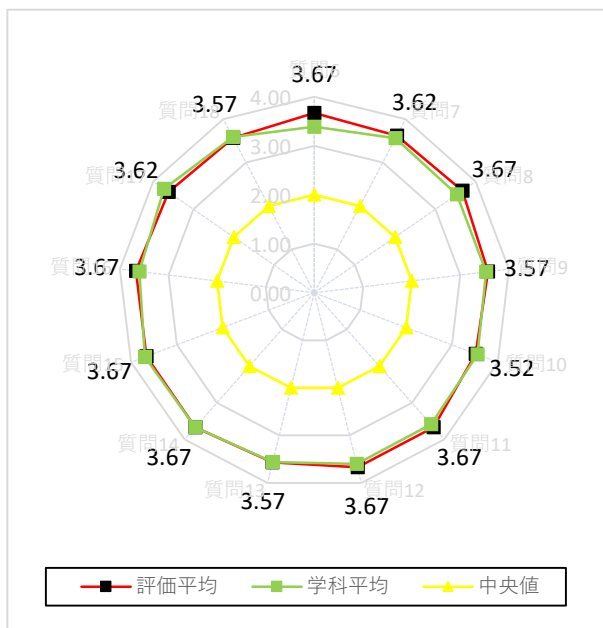
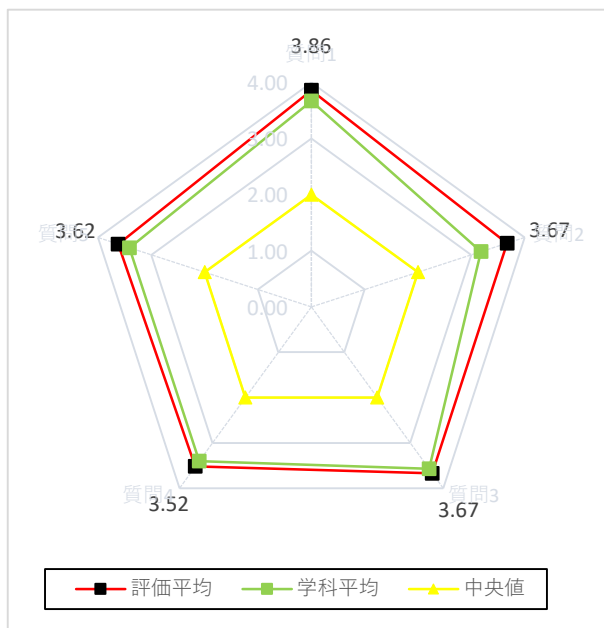
1. 担当学生の個別性を十分見極めるためのチューター面談の充実
2. 各個性からグループメンバーの個々の役割を考えチームとして行動できるよう支援する
3. あすなろうに授業理解・意味を確認しながら共に考えて行動できるように支援する。
4. 他のグループとの協働作業に協調できるよう、教員2名で調整を行い課題テーマなどを実施できる体制をつくる。
5. 他のグループの状況や、発表内容を客観的に評価でき個人・グループ課題が見いだせるように支援する。

上記5項目を、計画の添って個人・グループに寄り添い支援を行い、あすなろうの目標理解達成できることを取り組んでいきたい。

教員同士の協調も大切であるため、情報交換や課題達成における話し合いなどを行い1年間支援していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		あすなろうⅡ 応用（地域課題）	77名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

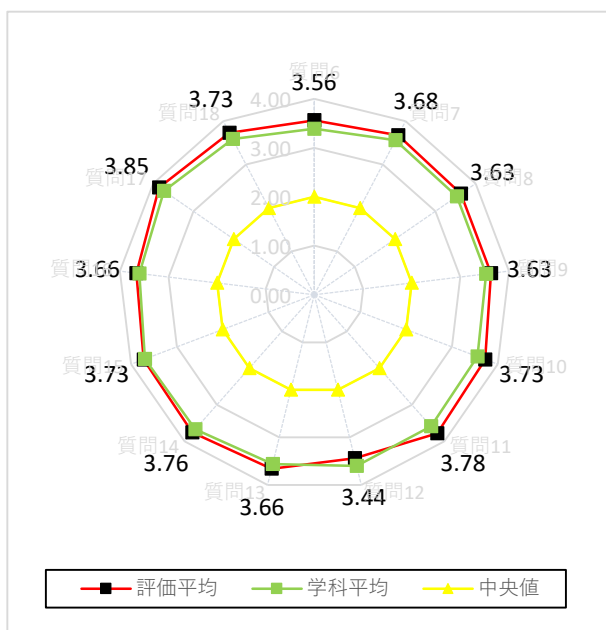
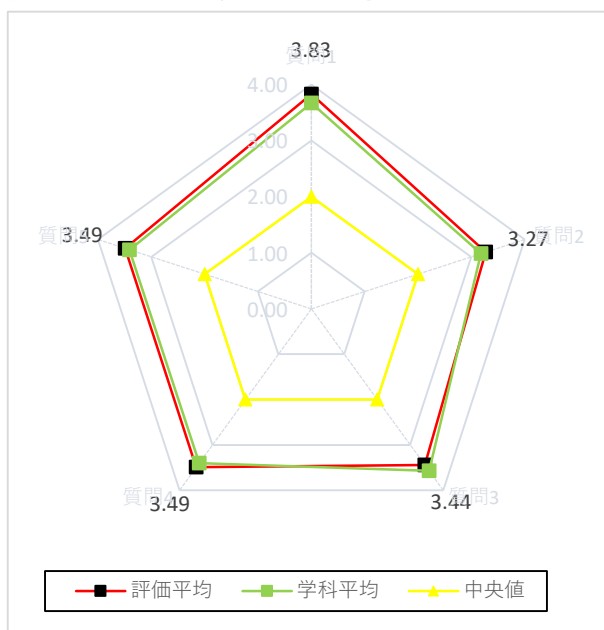
後期の地域の人々の暮らしと健康を守るヘルスプロモーションについての学びでは、グループワークを取り入れて、学生が主体的に参加する形式とした。1月以降は新型コロナウイルスの拡大で、対面実施予定を遠隔にせざるを得なくなったが、学生は協力して遠隔での発表までスムーズに実施できた。看護の対象である地域の人々について、自分や家族を主体とした地域の暮らしを中心としてとらえながら、広い視野を獲得することができた。

(3) 次年度に向けての取り組み

来年度は学生数が30名増加するため、グループ活動や内容について検討が必要である。できる限り、学生自身一人一人が主体であるにとらえられるような演習構成に努めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		病理学	105名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

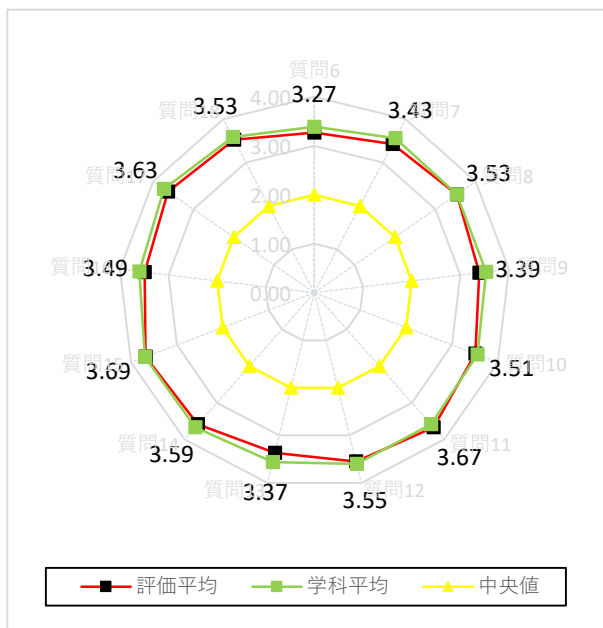
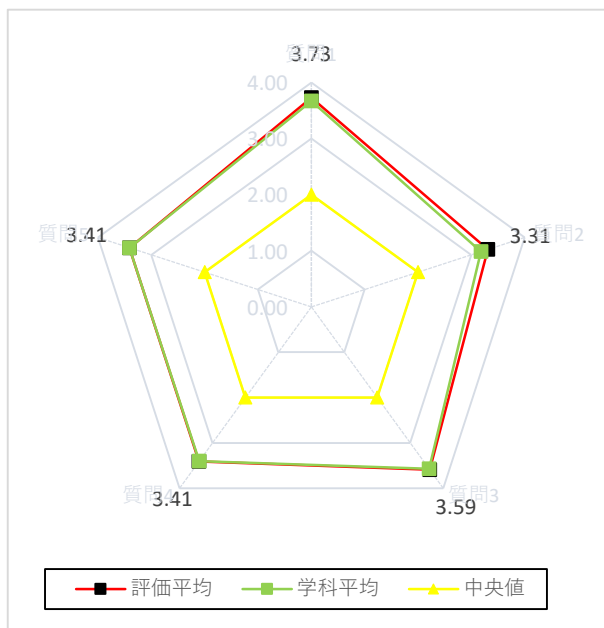
1. 質問6のシラバスが有効に使われていない。シラバスの説明がまだ十分ではない。
2. 質問の7、8、9、10は昨年より向上している。
3. 質問12の、声の大きさ・明瞭さなど昨年より向上しているが、まだ不十分。
4. 質問18の、授業の総合的評価は昨年よりやや向上している。
5. 学生より、小テストの提出率が向上しなかったのは「提出状況が成績に関わるとなると皆提出するのでは」との指摘があった。次年度は参考にする予定。

(3) 次年度に向けての取り組み

1. シラバスが有効に使われるべく改善を図る。授業の覧に授業内容のキーワードをあげる。また、復習の一環として、小テストを導入してその解説を行う。
2. 講義の時の声の大きさ・明瞭さなど、さらに明確に話すよう気をつける。
3. 小テストは引き続き毎回実施し、評価の対象とする。
4. 講義は総論に加え、各論をもっと増やすべく講義内容の見直しを行う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		病態治療学Ⅲ（筋・骨格、感覚器）	77名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

概ね平均的な結果であるが、自己学習（特に復習）を行っていない学生が一定数見られるようである。講義内容が幅広く、講義スピード（1枚あたりのスライドの表示時間）が早かったため理解しづかった様である。

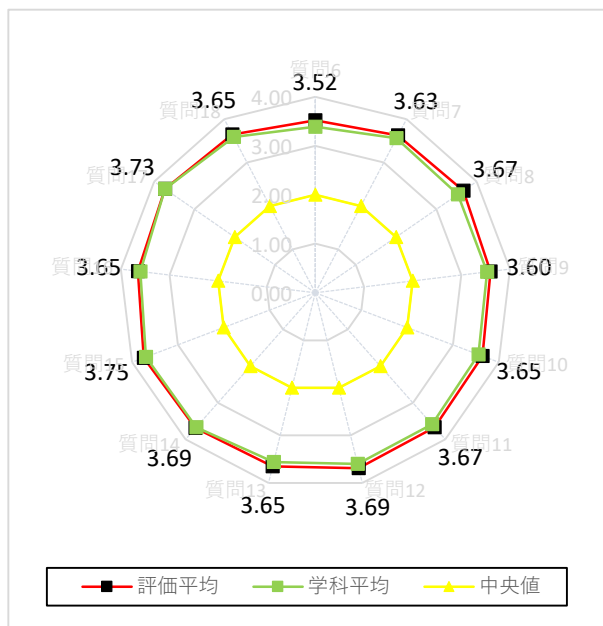
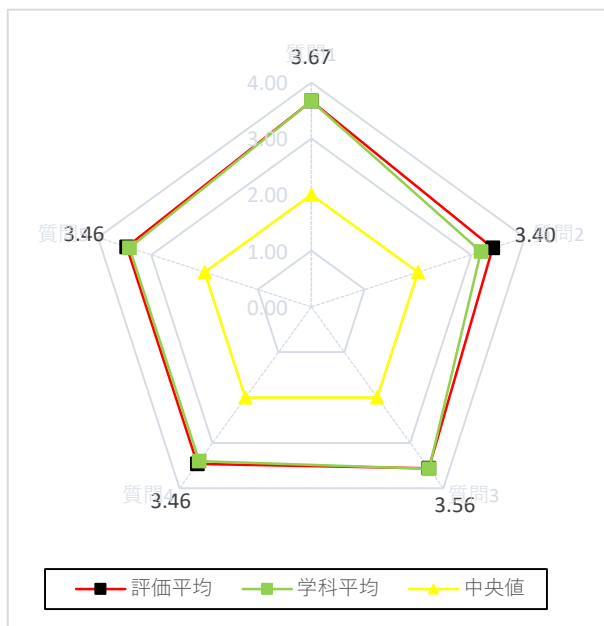
予想以上に「聞きながら書く（ノートを取る）」ことが苦手な学生が多いと感じた。

(3) 次年度に向けての取り組み

スライドでの解説となるためプリント資料への書込み部分を少なくしたが、ノートを取る時間にも口頭での解説を行なった部分があるため、基本的にノートをとってもらう間は説明を行わない。また、教科書の代わりになる様にと資料を作成してため配布プリントの情報量が多く、一部の学生が十分に消化できない様だったため、プリント内容を少し削減する。復習重視で予習については従来はあまり指示していなかったが、その日の講義範囲程度の予習（あらかじめプリントを見て来る）程度は行う様に変更する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		病態治療学Ⅳ（神経・難病、精神疾患）	83名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

3名の教員によるオムニバス授業である。各教員がそれぞれ工夫しながら遠隔授業を実施した。学生のアンケート解答率は67% (56/83)であった。

全ての項目において、ほぼ学科平均と同じくらいの結果であり、特に問題点は見当たらない。

自由記載から抜粋

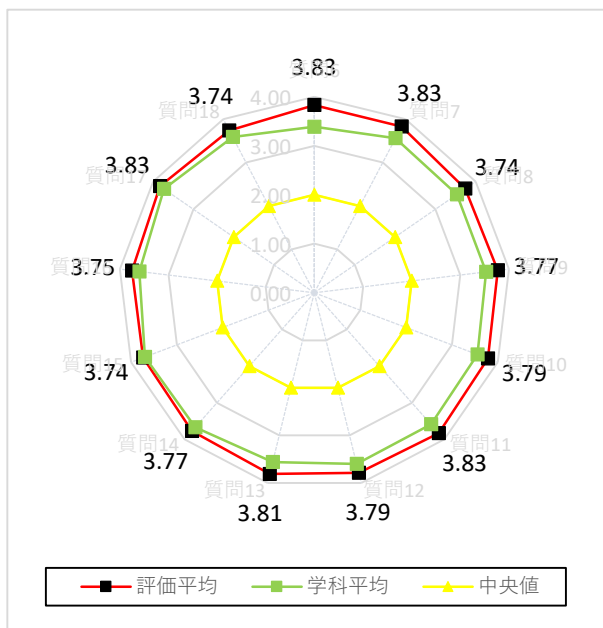
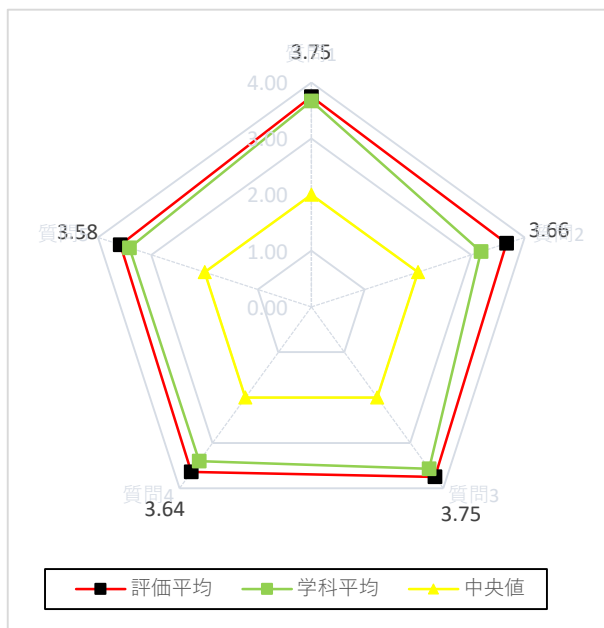
- ?難しかったが楽しかった。理解できていない部分がたくさんあるのでもう一度勉強したいと思う。
- ?遠隔授業でもノートなどわかりやすくまとめられており自分で書き込みながら学習することができ良かったです。
- ?学生それぞれが理解しやすいように授業をしており、とてもわかりやすく感じた。
- ?遠隔の録画された授業動画も項目ごとに分けてあり、自分のペースで授業に取り組むことができた。
- ?授業後の復習問題もその後の授業やポートフォリオで詳しい解説やコメントがありとてもよかった。
- ?先生の先生も分かりやすく教えて下さり良かったです。国試に出る問題などもしれたので良かったです。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度は担当教官変更のため詳細は不明

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		臨床関連技術論演習	77名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

授業評価アンケートの回答率は68.8%であった。全項目の平均値は3.76であり、概ね学生のニーズに対応した授業であった。項目別にみると、学生の授業への参加態度をあらわす質問1～5の平均値が3.68と他のカテゴリーと比べて低かった。この点は昨年と同様の結果であった。要因は明らかにできないが、学生自身が主体的・能動的に授業へ参加できていないことが影響していると考えられる。授業方法に関する質問項目については、平均値が3.80であり高い評価であった。昨年度に引き続きCOVID-19感染拡大に伴い、対面授業から遠隔授業への変更、学内演習においては、実習室内の環境調整やベッド配置の工夫、グループ人数や演習方法の調整が必要となったが、学生の授業への興味・関心を高め、学修内容の理解を促進することができたと評価する。教員の対応に関する質問14～質問17について、平均値は3.77であり高い評価を得ることができた。授業終了後、学生に記載してもらっている「授業カード」の質問事項や感想・意見に対してTeamsを活用し、速やかにフィードバックをしたり、授業方法に活かすようにしたことが評価につながったと考える。

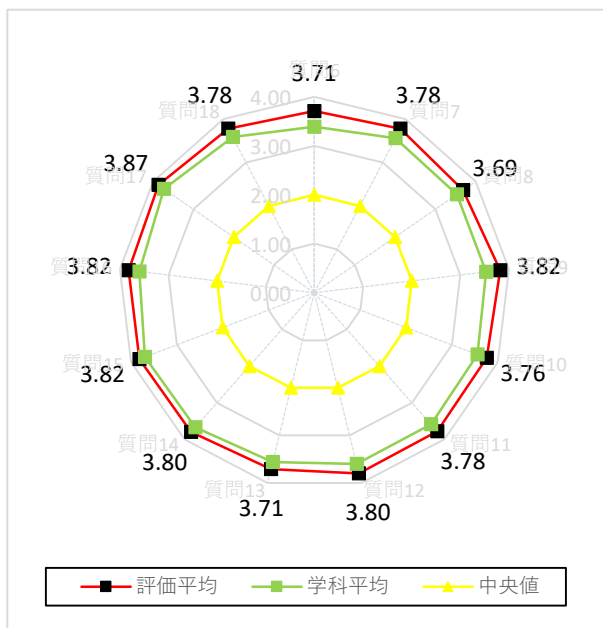
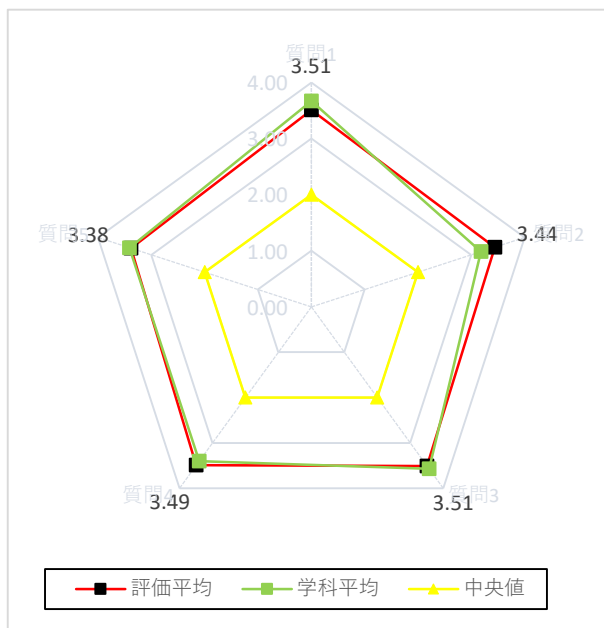
(3) 次年度に向けての取り組み

以下の点について、継続して取り組む。

- 1) 学生が授業への能動的な参加ができるように、授業でのシラバスの活用やTeamsの学修支援機能を活用した事前学修の提示および確認、授業内容の理解への支援について引き続き取り組む。毎回の授業終了時実施する「授業カード」に記載された学生の意見や質問事項については、速やかにフィードバックを行う。
- 2) 臨床判断能力の基盤となる状況認識およびアセスメント能力の育成を意識した授業方法の工夫を行う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		成人看護学方法論Ⅱ	89名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

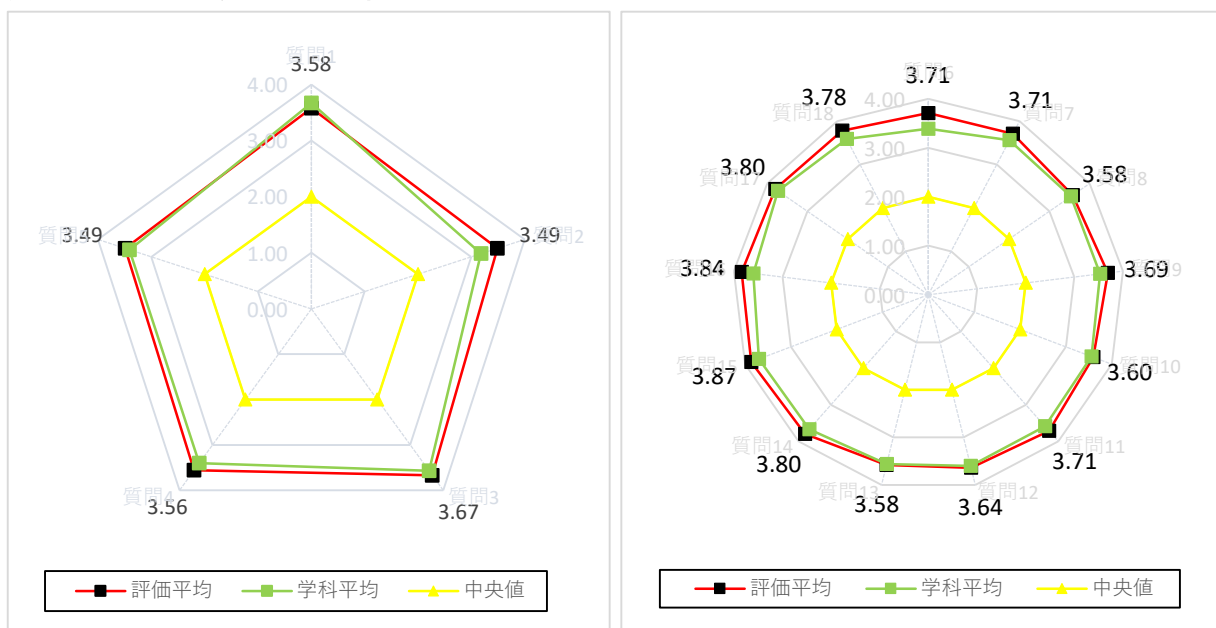
学ぶための手段、テキストの選定、検索エンジンの活用など、講義・演習で積極的に指導を進めた。そして、座学の授業だけでなく、臨床推論シミュレーション演習や自己血糖測定演習、コミュニケーション演習などの体験を重視した演習を多く取り入れることで、成人期の慢性疾患を抱える患者にとって必要となる援助を導き出すアセスメント能力の学びが深められた。

(3) 次年度に向けての取り組み

前年度と比較し、講義・演習で活用したテキストや資料を臨地実習でも活用でき、講義・演習が臨地実習につながる学びとなっていたことを実感できた。そのため、今後は実習で必要となるカンファレンスの進め方といった方法論も取り入れていく必要がある。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		精神看護学方法論	89名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

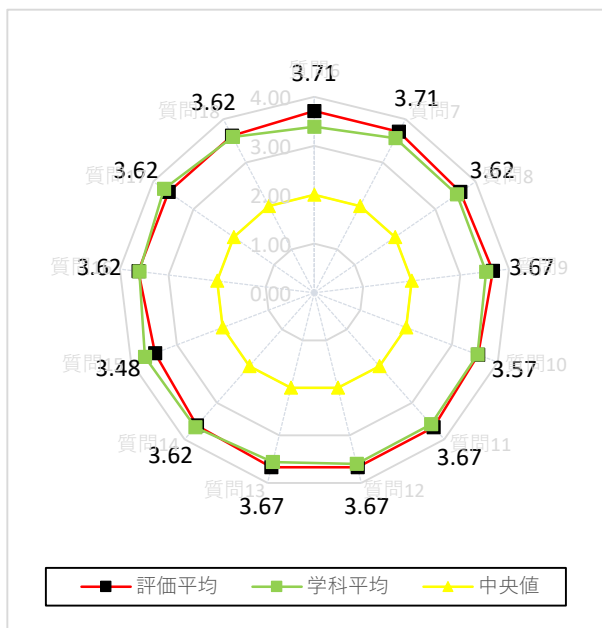
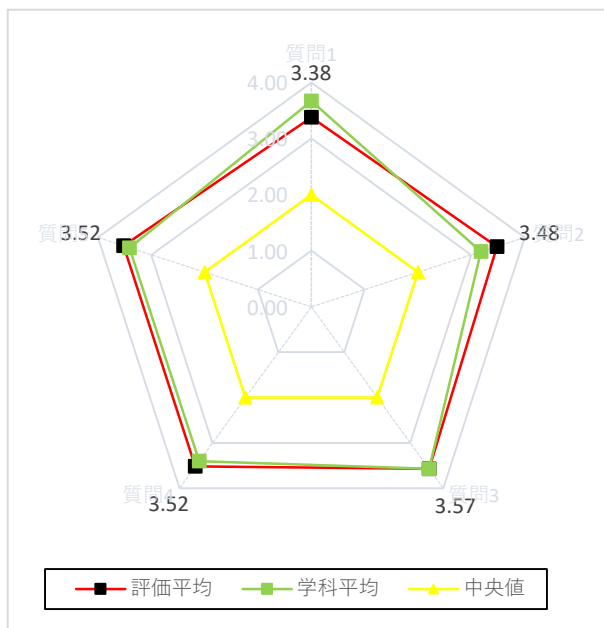
全体的にいずれの項目において、学科平均の評価である。質問14項目に関しては、学生一人からの質問に対して、全体で共有できるように次回の講義時間に回答することを意識しながら誠実に対応した結果であり、高い評価を得られた。毎回授業終了後、学生からの授業評価、質問、意見、要望についてリフレクションシートを提出してもらい、質問8、9、12、13、14、15、16、17項目について心がけており、結果に反映している。

(3) 次年度に向けての取り組み

リフレクションシートの活用を継続し、学生の理解度を確認しながら、シラバスに沿って授業展開を行い、到達目標を明確にする。さらに学生にわかりやすく、教材の工夫と説明を加えながら授業を進めていく必要がある。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		母性看護学概論	81名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

結果の分析と評価

学生自身の評価では、授業欠席があり全員無欠席の達成は難しいと思う。

その他に評価においては、学生自身の授業に向きあう姿勢はおおむね達成できていると評価している。

授業内容分析では、多くの課題を次の母性看護学方法論に継続して授業展開が出来るように工夫して行った。

各学生に各自課題をポートフォリオ形式でまとめ提出も評価対象とすることで各学生の取り組みや知識等の評価にもつながった。

また、3年次の領域実習でのグループダイナミクスを考慮して、学習課題をグループ毎で事前学習、その結果を授業内で発表し各グループのコメント・

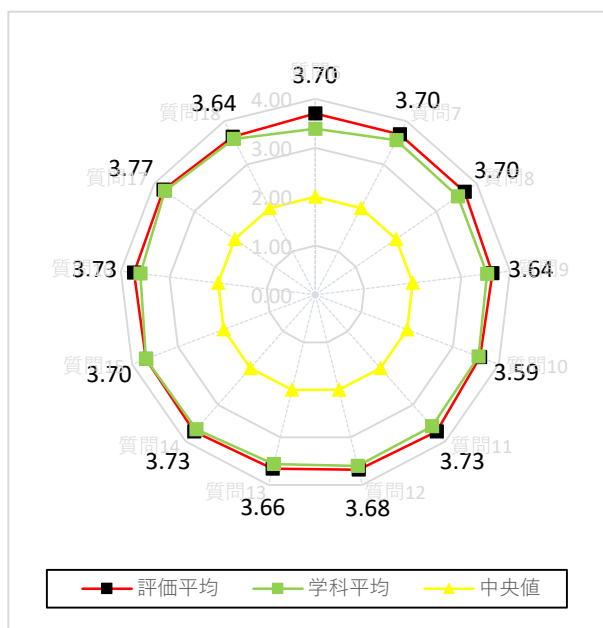
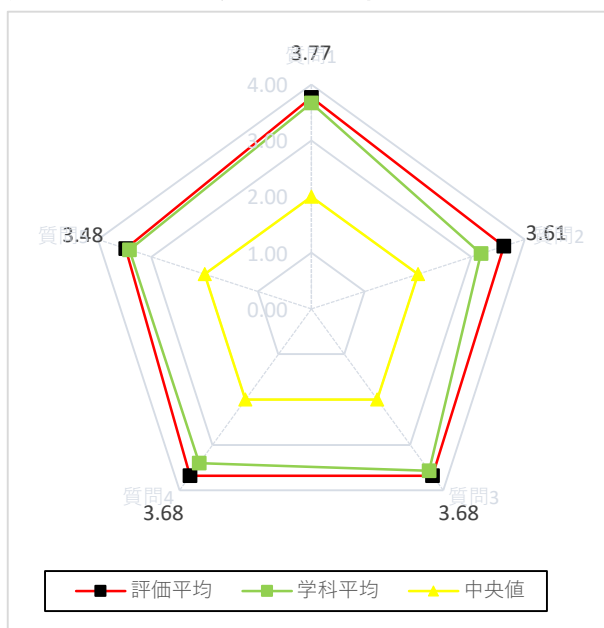
評価を行い最終結果を公表することで多くの学びがあったと思う。その為、学生の課題をどのように見出しそれをグループでまとめ、他者にのグループからの評価を一連の学習の継続の学びの大切さを理解出来たと思う。3年次の母性看護学方法論へ、どの様に反映するかで今後の課題として生きたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度は、科目担当は行わない。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		母性看護学方法論	89名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

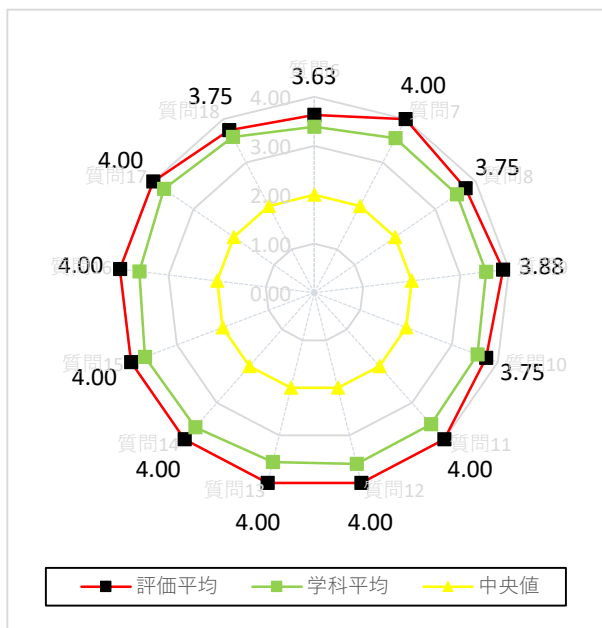
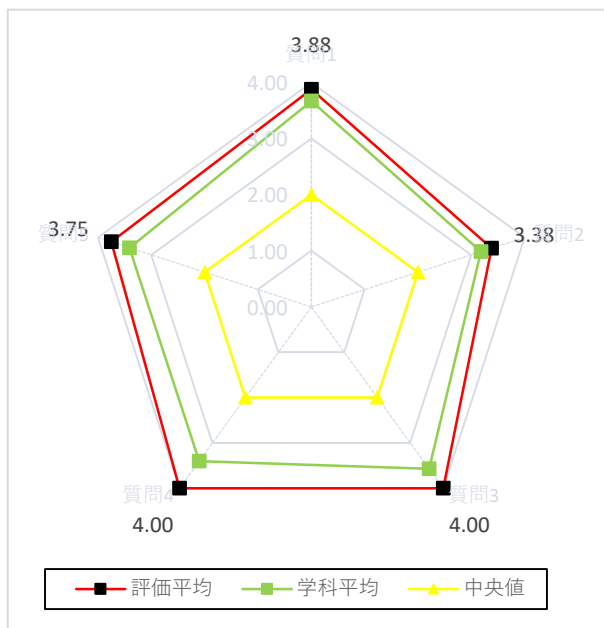
母性看護学方法論は、前年度色々な課題がありその問題点を検討し、内容を変更した。母性概論から方法論、さらに母性看護学実習への継続的な道筋を工夫することで効果的な学修を学生に提供できるかを考えた。事前学習・講義・事後学習の系統だった課題をまず個人で学習し、その課題をグループで検討後に実習で記録する記録用紙を実際に使用することで大きく前進できたと推察している。その内容をグループ毎で発表し、他のグループ発表で多くの学びが得られ、妊産褥婦と新生児、それを取り巻く家族へと母性領域のイメージへと繋がることで、学生自身は演習での学びで自己課題を見出し、積極的に何度も学びなおしていた。評価に対しても必ず自己評価・他者評価・教員評価で学生の視点、教員の視点で平等に評価できる方法も工夫したことで、学生は自己分析が客観的に自分を課題を見つけることが出来たと思う。

(3) 次年度に向けての取り組み

授業担当ではない。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		母性看護学実習	89名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

母性看護学領域の実習場所は6か所あり遠距離で宿泊しないと実習に支障をきたす施設があるため、宿泊においては事前に経済的な金額を把握して学生に情報を提供して支援してきた。

学内記録物は学生にとっては多くの記録物提出があり、多くの学生にとっては大変だの声も多く聞いていた。前年度の反省から、母性看護学方法論から授業方法を見直し、実習での記録がスムーズにできる工夫を行ってきたことで、大変だったとの意見の裏返しで多くの学生が実習終了後の達成感は大きかったとの声を多く聞きことが出来た。実習施設においては、前年度の実習内容から評価を得ていたこと、また施設ごとに実習評価の課題を説明し、今年度の実習内容の変更や追加を協議して行ったことで、学生への受け入れが前年度と比べてとても実習環境が整ったと考えている。

実習の総合的な評価として、全員の学生が自己の実習成果を、各実習施設や学内で発表することで他の疾患や指導方法、システムの違いなどを共有することができた。最初は記録作成が手書でしかできない学生も指導や学生同士の支援で達成できたのも大きい。

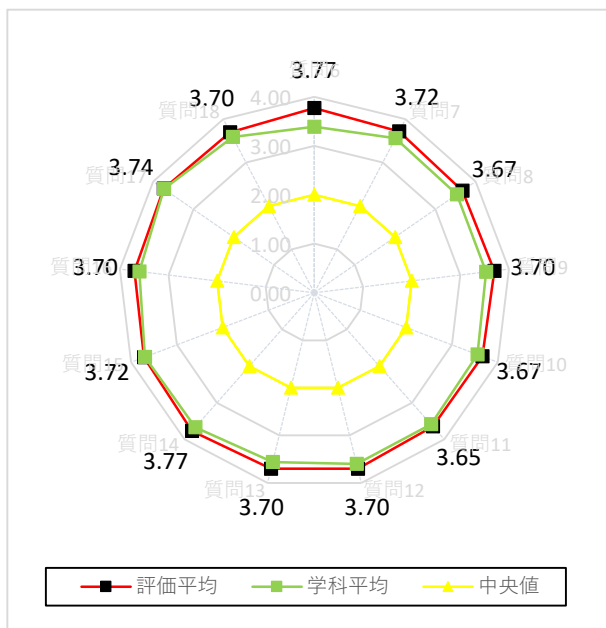
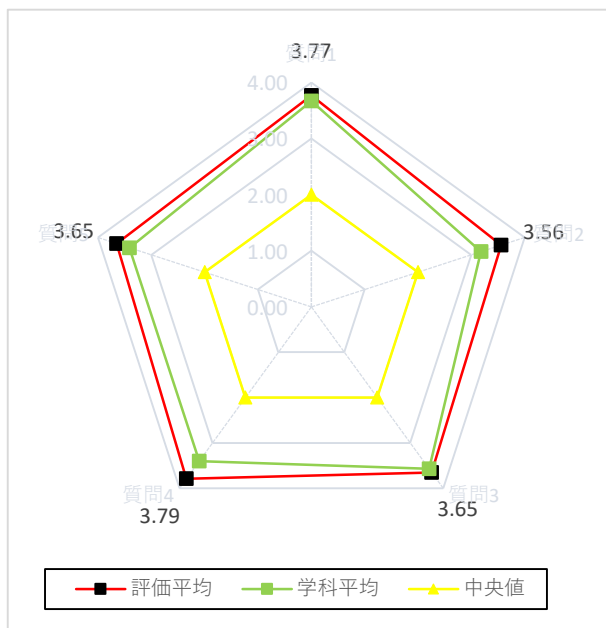
評価においても実習担当教員3名と学生で平等に評価が出来た。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度は担当しない。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		小児看護学方法論	89名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

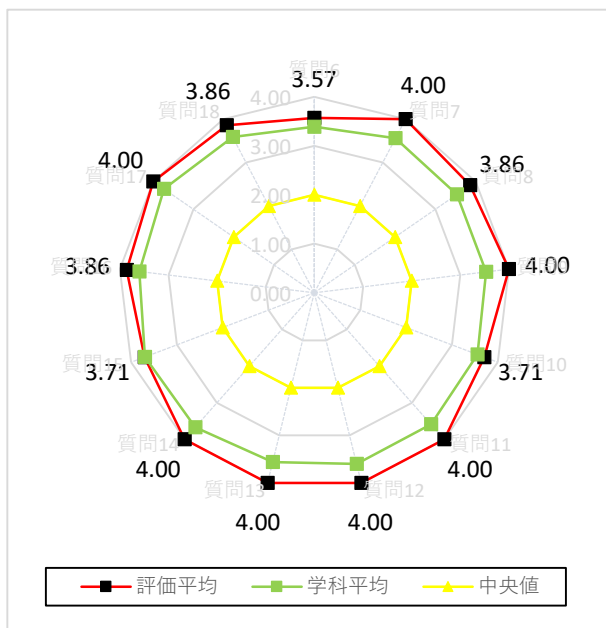
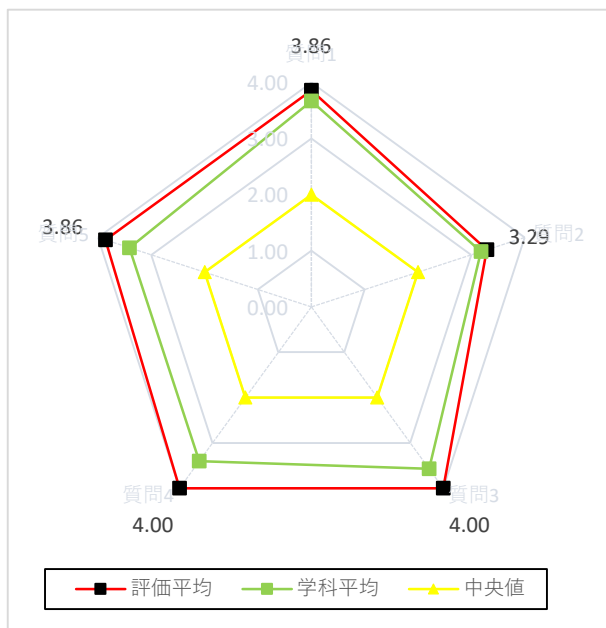
すべての項目において平均あるいは平均以上の学生評価であった。
 学生が提出した授業レポートへのコメントや返却などがリアルタイムに実施できなかったところが
 今後も課題であるとする。
 授業評価を出していない学生も多かったため、学生への周知が足りなかったと考える。

(3) 次年度に向けての取り組み

学生のレポートをコメントをいれてなるべく早く返却する。
 授業中に適宜発問をいれていくなどして工夫していく必要がある。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		小児看護学実習	89名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

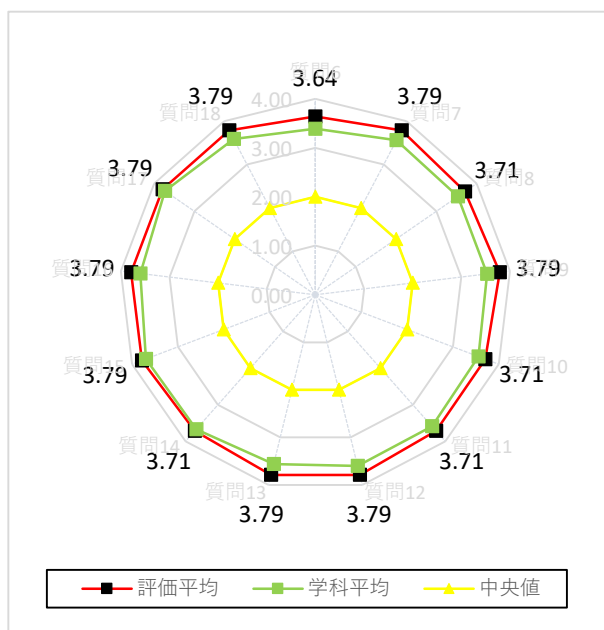
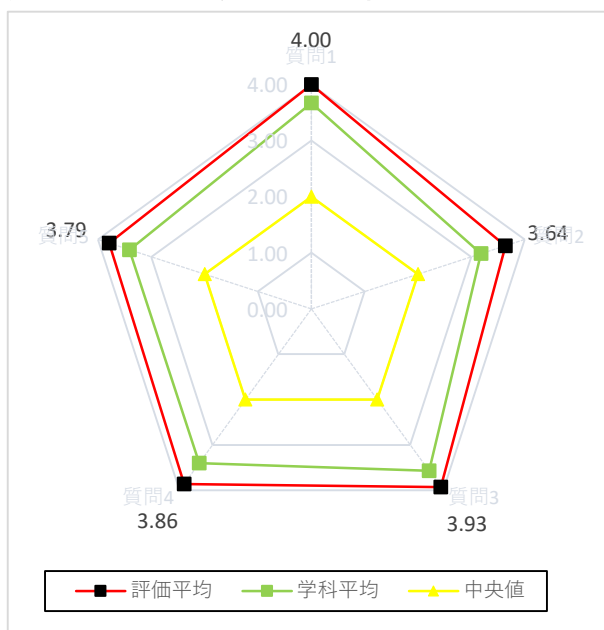
ほぼすべての質問内容で平均以上の学生評価であった。実習では、臨床との連携を密にとり、一人一人の学生の特性をとらえながら双方向的なやり取りをしながら個別に対応したことがよかったと評価できる。しかし、質問2のシラバス（授業計画）を活用しましたかの内容に関しては平均より評価が低かったため、検討が必要である。

(3) 次年度に向けての取り組み

シラバスの内容を適宜表示し、学生が活用できるように工夫する必要があると考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		関連職種連携実習	40名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

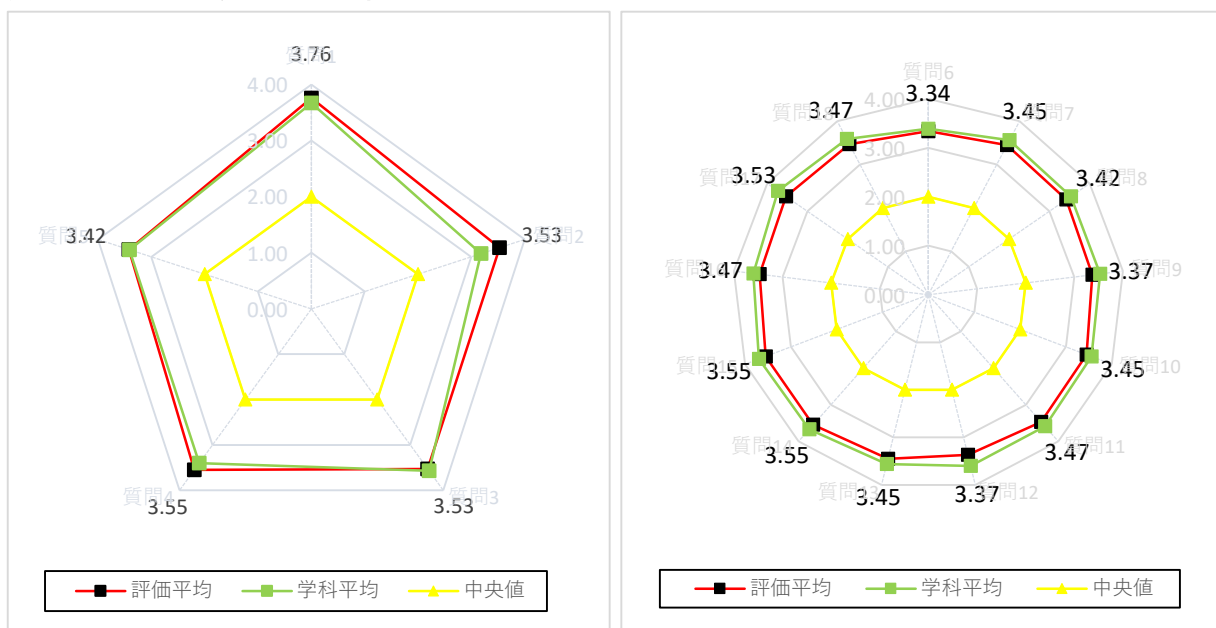
コロナ感染者急増による実習受け入れ施設側からの受け入れ中止が多かったが、代替実習として、実習施設と大学をZoomを活用した遠隔でつなぎ、学内実習（遠隔式学内実習）を展開できたことで、実習施設のスタッフとの距離感が近くなり、双方向的な深い学びにつながった。

(3) 次年度に向けての取り組み

遠隔式学内実習の学生数の配分を検討する必要がある。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		看護管理学	88名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

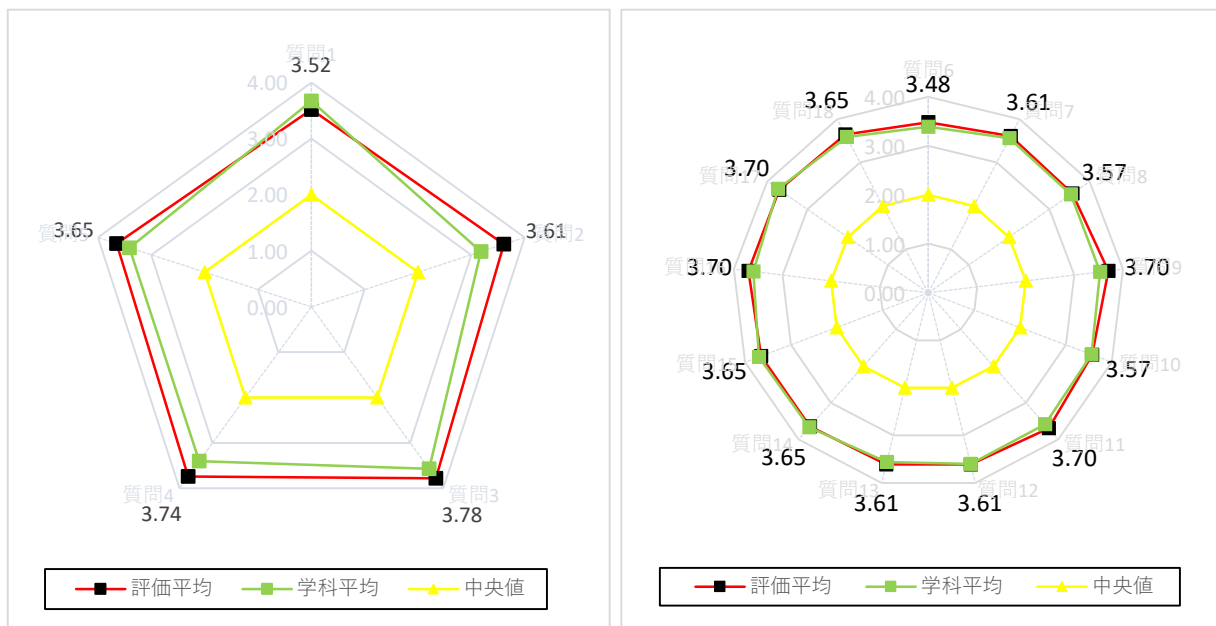
回答者は88人中38人（回答率43%）であった。失格はなし。
 全項目の平均値は3.49であり、学科平均値（3.62）をやや下回った。
 新型コロナウイルス感染の拡大、蔓延の影響を受け、対面授業とZoomによる遠隔授業のハイブリットで行った。
 4年次の集中講義であり、短期間に15回の講義、1日2コマ続きの授業、1週間4コマの遠隔授業は、学生の集中力の継続と期間をあげず実施される授業内容の理解を必要とした。
 そのような中でも、学生の参加態度を表す質問1～質問5においては、学年平均値を上回るかほぼ同程度の評価となっており、能動的な授業参加ができていたと評価する。
 一方で授業方法に関する項目については学科平均を下回り、特に質問9と質問12では「2」と回答した学生が複数いた。自由記述には肯定的な意見しか記載されていないため直接的な要因は明らかにできないが、授業内容の理解を深めるための工夫として、遠隔授業では一方的な講義にならないように、授業の組み立て方を見直すとともに、アクティブラーニングの積極的な導入を行い、ダイナミックな授業展開が必要と考える。

(3) 次年度に向けての取り組み

シラバスは授業開始時に説明し、さらに詳しい予定表を配布して説明を行ったが評価が学年平均を下回っていたので、シラバスだけでなく、課題レポートの評価（ルーブリック）なども提示し、Teamsにも説明を加え、授業外でも確認できるように工夫したい。
 授業内容の組み立て方は、今年度のシラバスと授業のレジュメを見直し、再編成することが必要である。テキストの目次通りに進行すると、混乱するような内容も含んでいるため、どの内容を学んでいるのか、俯瞰できるような機会を作り確認していく必要がある。
 ダイナミックな授業展開ができるように、教材や資料も活用し、学生が能動的に授業へ参加できるように取り組みたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		看護管理実習	48名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

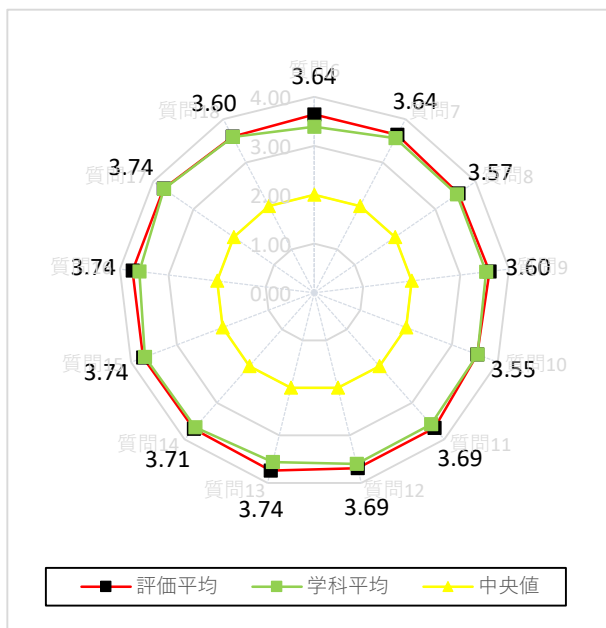
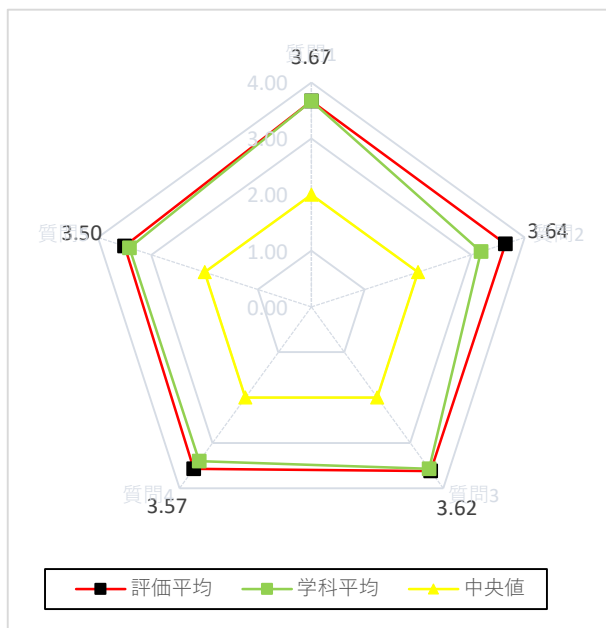
回答者は48人中23人（回答率48%）であった。全項目の平均点は3.64であり、看護管理学の平均値および学科平均値を上回った。新型コロナウイルス感染症の拡大・蔓延のため、全12グループ中、臨地実習が実施できたのは4グループであった。残り8グループは学内実習となった。「看護管理実習」は佐賀県内ではほとんど実施されておらず、どの病院でも初めての実習受け入れであった。そのため打ち合わせを重ねて、本学の目標を達成できるように、実習病院の特性を踏まえた実習プログラムを提供していただいたことが、目標達成に結びついて、「看護管理学」を机上の理論から実践へと結び付けられ、より深い理解へ導くことができたと評価する。臨地実習と学内実習での学びの差が出ないように、また教育の質を担保するために、実習病院の看護管理者や安全管理・感染管理担当者には、直接大学に来校してもらい講義を実施、病院と大学をZoomでつないで、遠隔でのオリエンテーションや看護実践について説明してもらった。多重課題への対応は、リアルな実践場面を設定し、シミュレーションを行った映像を指導者に視聴していただき助言を受け、学びが深めた。

(3) 次年度に向けての取り組み

学内実習はかなり工夫を凝らして教育の質を落とさず、実習目標を達成できるように実施したつもりであるが、「臨地実習に行きたかった」という学生の意見もあった。今後、看護基礎教育において、隣地実習のあり方も変化することを鑑み、さらなる工夫や教材の研究が必要と考える。評価としては、シラバスの説明がないと複数から評価されていたので、相手に伝わるような説明を行いたい。なお、授業参加度がやや低いのは、新型コロナウイルスのワクチン接種後に実習があったため、副反応による公欠者がかなりいたためと推測できる。欠席については今後も配慮が必要である。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		看護研究方法論	89名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

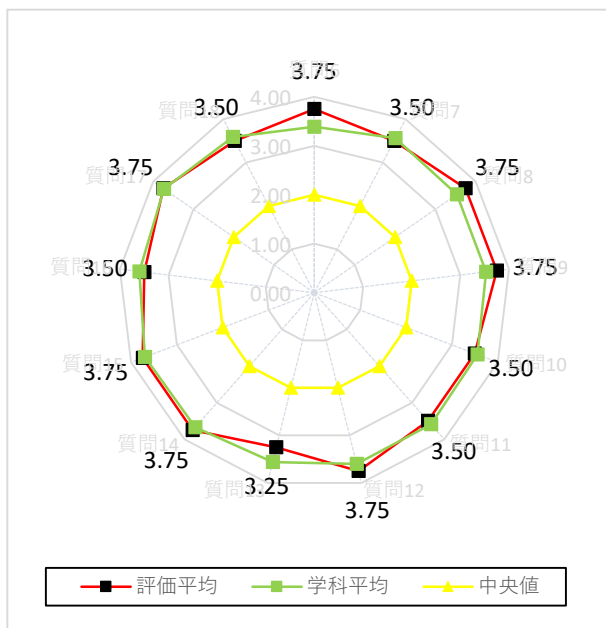
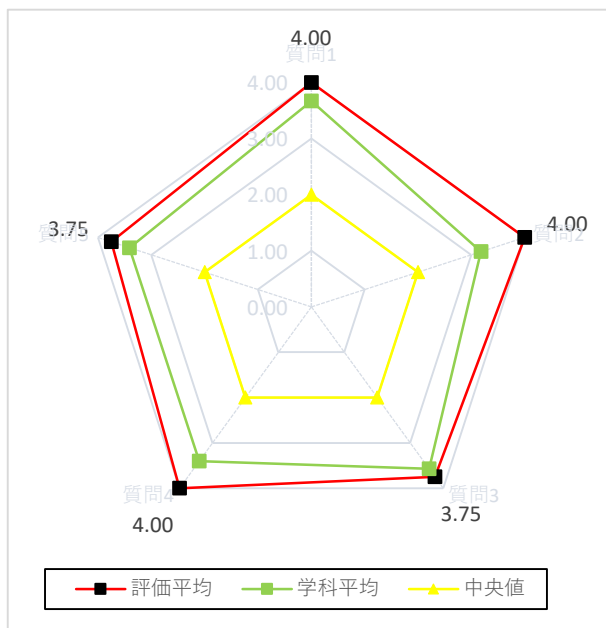
文献検索オリエンテーションの時間が短く、文献検索演習を行う時間がとれなかったことと、文献クリティック演習の時間が少なかったことで、学生にとって看護研究を学ぶ上で、少し難しかったのかもしれない。しかしながら、研究プロセスを得て、研究計画書を立案し発表まではできており、研究を学ぶプロセスは理解できていたと考えられる。

(3) 次年度に向けての取り組み

文献検索オリエンテーションと演習時間、文献クリティックのグループワーク演習時間を増やし、検討していく必要がある。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		看護研究ゼミナール	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

この授業は、4年次通年を通して、看護及び関連領域の知識等をもとに、研究課題を設定し、文献検索を行い、その結果を整理して研究論文と抄録にまとめる中で、論理的思考や科学的問題解決能力を養い、研究の基本的なプロセスを学修することをねらいとする。

担当した4名全員が教職課程履修の学生であり、前期は教育実習（5月～6月）、教員採用試験受験（7月～8月）、在宅看護学実習と関連職種連携実習（7月～9月）の合間を縫って、研究プロセスや文献検索の方法、論文のフォーマットなどについて、ゼミナール形式で月1～2回程度指導を行った。

8月以降の個別指導については、10月までの個別指導計画を提示し、在宅看護実習（9月）、教育実習（10月）などの合間を縫って、週1回程度指導を行った。10月中旬には抄録を、10月下旬には論文提出といったハードスケジュールであり、学生にはかなり負荷が大きかったと思うが、各自工夫をしながら教員の指導に対応し、全員が提出期限内に間にあった。履修後の学生たちの満足度も高く、研究の入門としての学修目的は果たせたと思う。

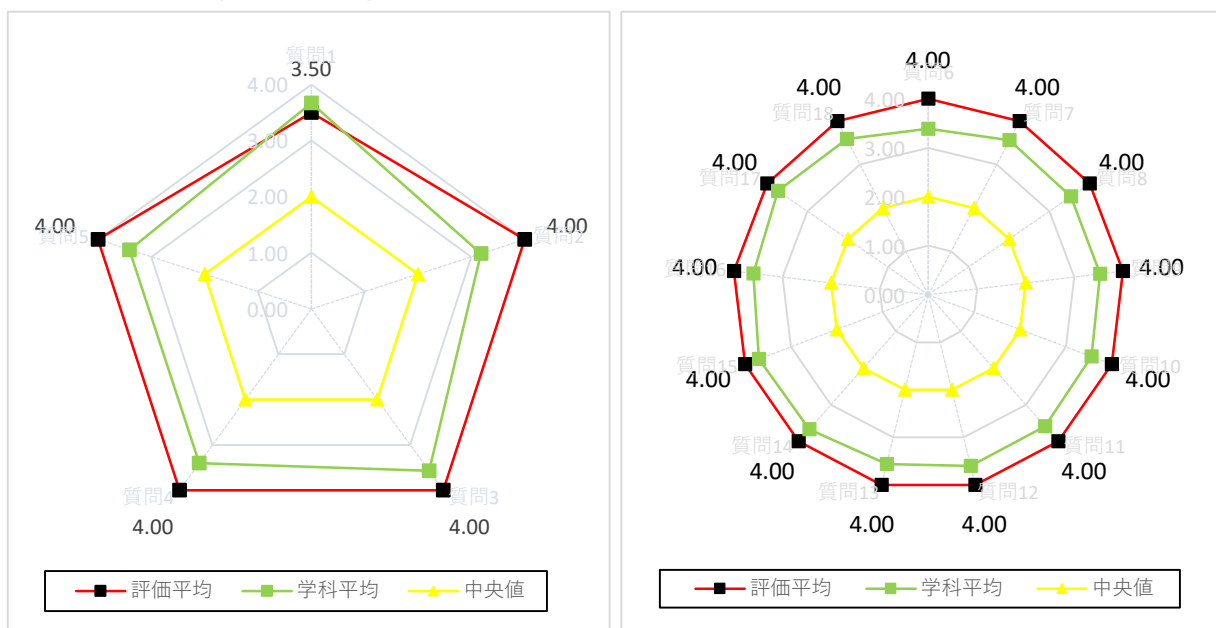
(3) 次年度に向けての取り組み

看護学部では前述のように、選択する課程（看護師課程、教職課程、保健師課程）によって4年次前期や夏休みにも看護実習（看護管理実習、在宅看護実習、関連職種連携実習＋教育実習もしくは公衆衛生看護学実習）がある。また、教職課程の学生は進路を左右する教員採用試験が7月～8月にかけて実施され、その対策指導も必要で、看護研究ゼミナールの指導時間の捻出が課題である。

看護実習や教育実習の合間を縫って、短時間で看護研究の抄録や論文を仕上げなければならない学生の負担は大きいことは承知しているが、完成年度まではカリキュラム上この流れはやむを得ないので、ゼミの指導を効率よくできるように、配付資料を検討していきたい。また、早くからゼミ形式の指導と個別指導の計画を提示し、論文等の完成に向けて学生が見通しを立て学修ができるように指導をしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		助産学概論	5名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

助産概論は選択科目であり、保健師過程と同時に並行して授業があったため、助産師を希望している学生はもいたが、保健師も大学で資格が取れるためそちらを優先して受講していたため学生数は少数であった。大学構想の中で開設時、助産師の養成が企画されていたが4年経過したが進展していない。しかし佐賀県内の現状や社会の少子化の伴う母子保健に関する政府の方針が強化されている。母子保健の看護や後方支援を行う専門家は助産師である。その体制強化のためにも助産師教育の必要性を感じ、今後の活路を見出すために講義を行っている。

講義内容は、シラバスにも示したように、日本の母子保健の成り立ちや日本の助産の歴史や各地に残る風習・風俗が今も行われている行事の由来、日本と国際的視点の協力体制の違い、プレコンセプションケアに通じる内容、実際の助産師活動の現場視察等々興味ある構成で実施している。

その為、学生自身自分のライフサイクルを考え、看護職としての今後の在り方や方向性を考えることが出来効果的な授業と評価されたと考える。

(3) 次年度に向けての取り組み

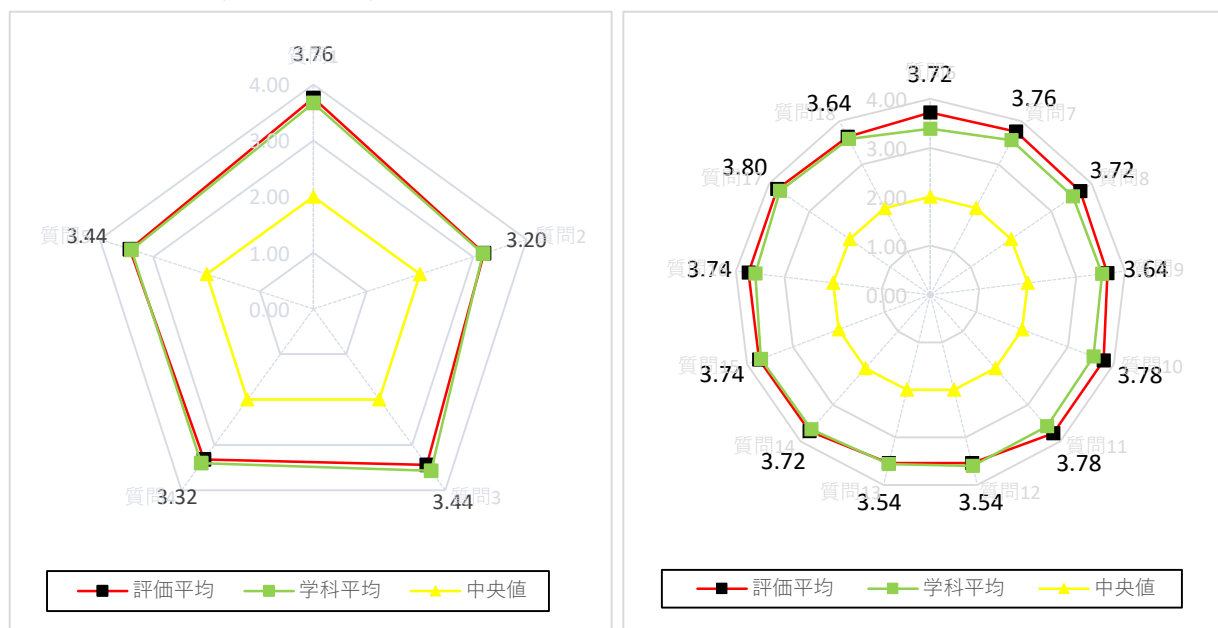
前年と同様の講義構成で実施予定である。授業時間編成は次年度検討をいただき、保健師過程とは切り離して枠組みを考えていただきたい。

今年度は母性領域講義から離れたため、助産概論の継続的な構成での講義が出来ない可能性がある。

講義構成内容は、看護教育の傾向としてチーム医療や看護倫理等が、重要な強化になっていくため助産概論は出生前診断や胎児条項など重要な課題も講義内容に含めた行きたい。それは、学生の社会への視点として熟知することで看護職としての基礎を考慮するとともに、プレコンセプションケアなども今後の課題であるため学外講義は今年度も実施し、多くの学びを得てほしいと考えている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		学校保健概論	54名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

この授業は、看護学科の保健師課程と教職課程（養護教諭一種免許状取得）を希望する学生の必修科目であるが、それ以外の学生も多く受講（選択）してくれた。前半は、新型コロナウイルス感染症の流行状況に応じ、シラバスを変更し演習のない授業を遠隔で行い、演習のある授業は対面で行った。グループ学習の制限があり個人演習（ワークシートの記入による学び）が多かったが、学生が子どもの健康や安全に興味関心を持ち、学校保健領域の保健管理や保健教育等の実務を学べるように、配付資料や授業内容の精選を行った。さらに、授業の最後にまとめをしっかり行ったことは、学生から高評価を得ていた。

具体的には、前半の遠隔授業では、授業を聞いての課題提出が多かったが、各自熱心に課題を仕上げていた。後半の対面授業では、遠隔等の授業で学んだことを2~3人による小グループでの演習で復習を行った結果、環境衛生や保健教育、子どもの健康課題について多くの学びが得られていた。

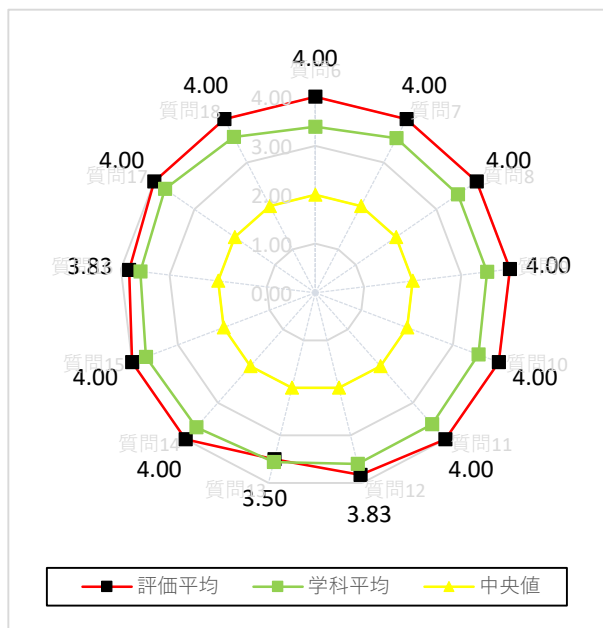
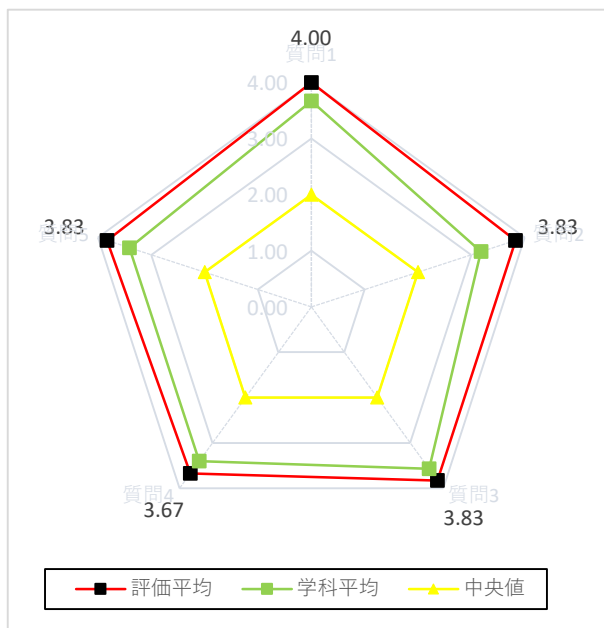
以上のように授業の工夫を行った結果、授業の総合評価では3.7の高評価を得た。学生自身の満足度も同様に3.7と高得点で、多くの学びが得られていた。

(3) 次年度に向けての取り組み

引き続き、授業では子どもの健康課題や安全に関する内容を取り扱い、学校保健の領域である保健管理や保健教育など子どもたちの健康や安全に関心を持てるような授業（演習を含む）を行っていきたい。そのために、国内外で起こっているトピックスなどを積極的に取り上げ、できるだけ演習を取り入れ、学生間の相互の学び合いができるように、配付資料や授業内容を精選し、活気ある授業を進めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		養護学概論	6名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

この授業は、「養護教諭一種免許状」取得のために教職課程の学生が履修する必修科目である。学校保健の3領域の教育活動や養護教諭の職務と職務遂行に必要な基礎的な知識や技術の実務について解説し、児童生徒の実態に応じて学校内の教職員や保護者、関係機関の人々と連携・協働して適切に支援ができる資質・能力の育成を目指している。

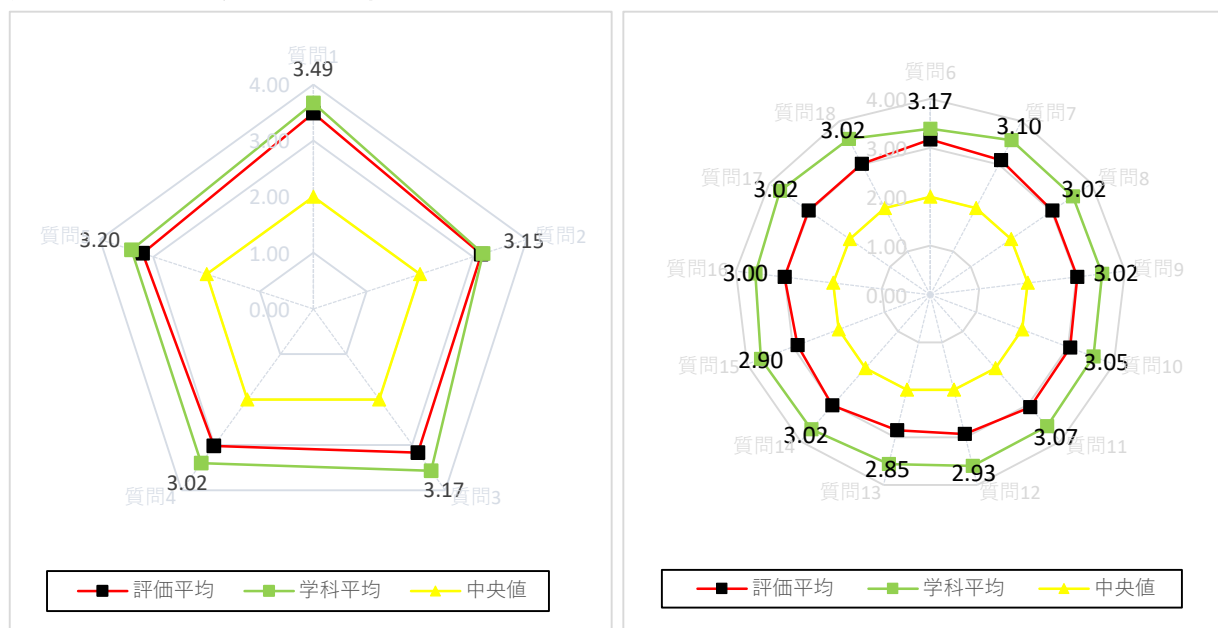
学校現場で必ず行う健康診断や学校環境衛生検査、保健教育（保健学習や保健指導）、救急処置や健康相談などの学校保健活動について講義や演習を通して学び、実践力を育成する授業を心がけている。また、教員採用試験受験を目指し、毎週確認テスト（小テスト）を行うと共に、保健学習のミニ授業や保健だより作成（授業外課題）など様々な教育活動の演習も取り入れている。そのため授業の進度も早くなりがちであるが、学生たちはいずれも熱心に取り組んでいて、その結果授業への自己評価や授業評価が高いと考える。

(3) 次年度に向けての取り組み

養護学の概論と方法論を1科目に集約した授業であるため、授業内容が広範囲でかつ演習も多いが、多くの学生たちは予習・復習を欠かさず熱心に取り組んでいる。今後も児童生徒に寄り添い、関係者と連携してチームで教育実践ができる養護教諭を目指して、講義や演習を通して実践力を育成していきたいと思う。また、4年次の教育実習や教員採用試験にもつながっていくように、授業を組み立てていこうと思う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
健康栄養学部 健康福祉学部 看護学部	健康栄養 社会福祉 スポーツ健康福祉		特別の支援を要する児童・生徒の理解	70名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

この授業は、教職課程（教員免許状取得）希望の学生が履修する科目で、子ども学部以外の健康栄養学科、社会福祉学科、スポーツ健康福祉学科、そして看護学科の4学科の学生総勢70名が履修している。昨年度から開講しているが、昨年度修得できなかった学生も多く再履修しており、昨年度より11名の履修者増加となっている。担当教員は、これまで学校現場で特別支援教育に携わってきた実務家教員2名が担当している。全ての授業は遠隔（Teams対応）で行っているが、まず業者の不手際で授業開始前にテキストの購入ができなかったこともあり、第1回と第2回は、テキストは使わず配付資料を使って授業を行った。ただ、テキストが入手できても購入しない学生がいるなど、学科によって授業への取組の温度差があり、授業後の課題を提出しない学生が一部の学科で10名以上見られることがあった。

そのため、早い時期に失格者が続出し、再試験対象者も増加した。学生自身の授業への取組の自己評価の低さが、授業全般への評価にも大きく影響し、昨年度の授業評価より全般的に0.5ポイント程低下している。

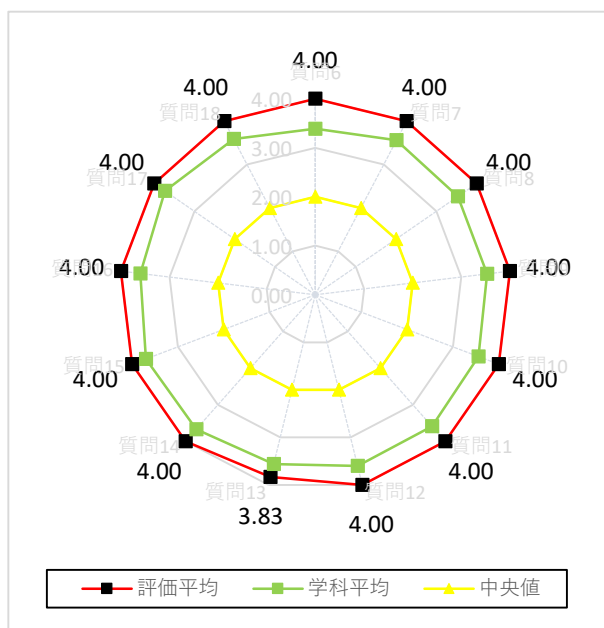
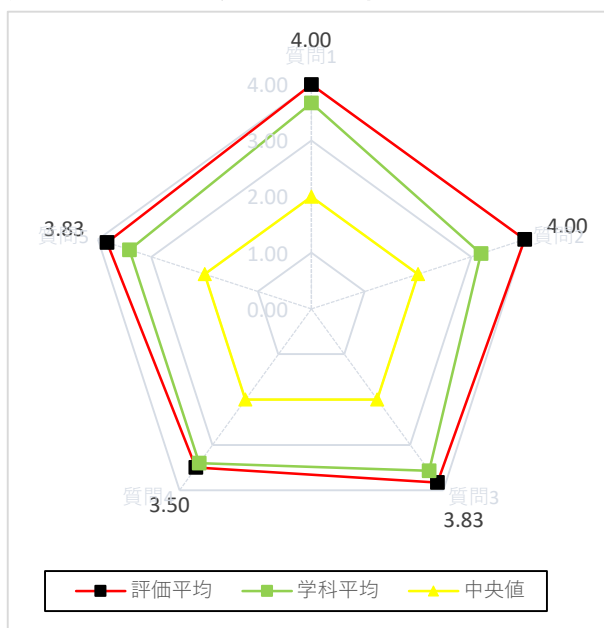
(3) 次年度に向けての取り組み

まずは、授業前にテキストの購入ができるように業者に依頼すると共に、課題提出時の盗用・剽窃行為の禁止、定期試験（課題）の受験資格者についても、オリエンテーションの中でしっかり周知し、学生の学習意欲を高めたい。

また、引き続き配付資料を工夫しながら双方向の授業を行い、現在学校教育の課題となっている特別の支援が必要な児童・生徒の理解と支援方法について理解が深まり、教育実習でのより良い支援につなげていけるように、授業内容や指導方法を工夫していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		健康相談論	6名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

この授業は、「養護教諭一種免許状」取得のために教職課程の学生が履修する必修科目である。昨今児童生徒の健康問題が複雑・多様化、深刻化し、心身両面への対応を行う健康相談（活動）が養護教諭の新たな職務に位置付けられた。

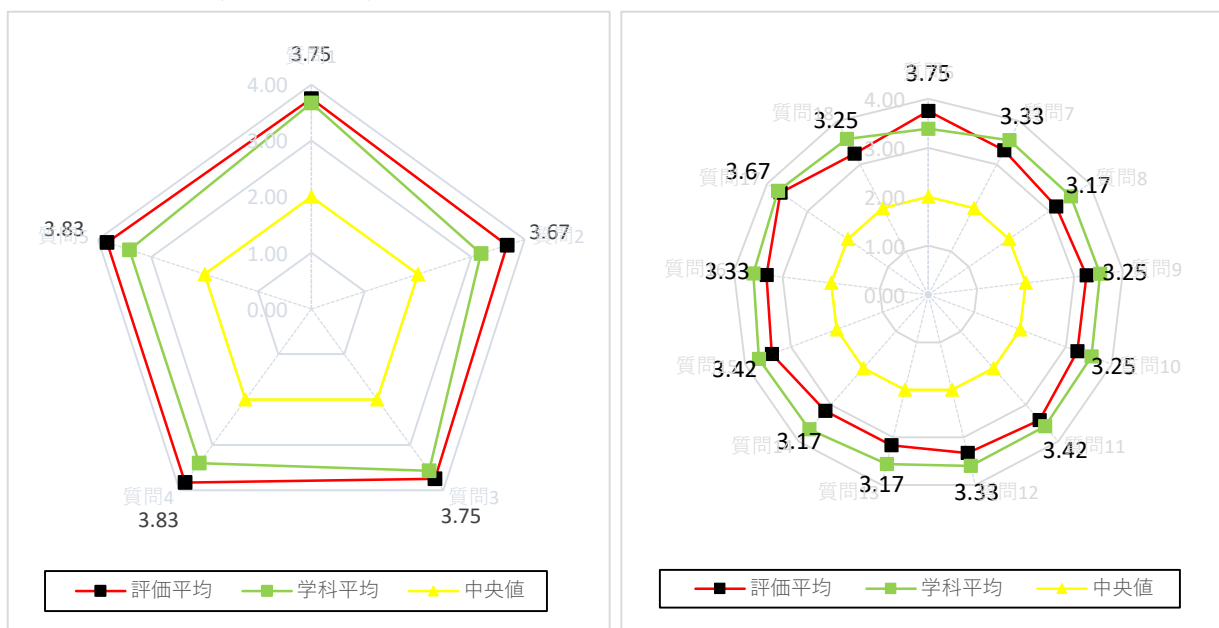
授業では、養護教諭の専門性や保健室の機能を活かした健康相談の理論と方法等の実務を理解し、児童生徒の健康問題に早期に気づき（早期発見）、早期対応・早期解決できる実践力の育成を目指している。そこで、健康相談に必要なカウンセリングの技法や保護者や学校の教職員、関係機関との連携・協働の方法について、講義や演習を通して学んでいる。また、児童生徒の健康課題について夏休みにお勧めの本を2冊読み、その内容を発表する中で学び合いも行っており、学生たちの主体的な学びを支援していることが、学生自身の自己評価や授業評価の高さに繋がっていると思う。

(3) 次年度に向けての取り組み

今後も学生たちが、児童生徒の健康課題に関心を持ち、背景を知り、具体的な支援計画の作成や実践、そして評価を行う一連の過程を学べるように、授業や演習内容を工夫していきたい。また、授業外課題を通して学びが深まるようにしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
健康栄養学部 健康福祉学部 看護学部	健康栄養 社会福祉 スポーツ健康福祉		教育課程論	75名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

回答者は、健福49人中7人、健栄20人中1人、看護6人中4人、計75人中12人である。課題提出ができず、欠席を繰り返した学生（健福がほとんどで20名近い）を除けば、全体的に授業態度も熱心で自己評価が高く、授業にも肯定的な評価であった。但し、健栄の1名の回答者は、ほとんどの項目で授業者の評価を1にしておき、不満の記述をしていた。課題提出がよくなかった学生であるが、このような不満をどう掘り上げるかが課題である。

本授業は、一方的に教え込む授業を避け、事前学習課題を課し、その学習成果を元に授業で学生に返していく反転授業に挑戦した。授業後は、事後課題を提出した。学生同士の直接的討論の代わりに、授業者の解説によって、学生自身の気づきや意見を交流させる疑似討論とした。全般に、学生の受講態度は熱心であったが、授業方法への戸惑いは当初、かなりあった。自主的な学習の重要性を、授業内容を通して伝えるように工夫し、努力した。大半の学生は、授業方式に協力し、よくついてきた。難解な理論的学問の内容にもかかわらず、ほとんどの学生が課題をきちんと提出し、よい成績を取ることができた。

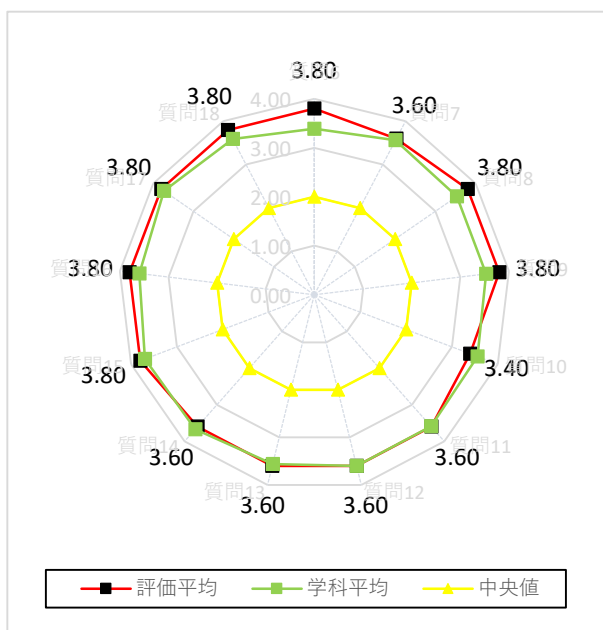
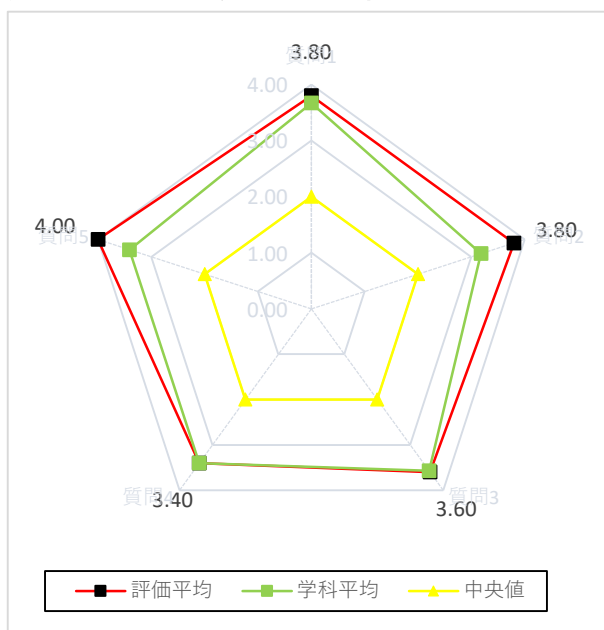
(3) 次年度に向けての取り組み

Teamsによる遠隔授業として、一方的に教え込む授業ではなく、反転授業実践への挑戦を進め、事前・事後学習や学習の自己評価（形成的アセスメント）を工夫した。また、公平性の観点から、課題提出の期限を厳密にしたが、システム上うまくいかないこともあった。学生の側にもネット環境、システム対応に差がある。授業者の努力ですべて解決するわけではないが、実情を踏まえて、最適な対応に心がけたい。さらに、学生の受動的な学習姿勢を主体的なものに転換できるように、その重要性を伝えつつ、授業改善に励むことが大事である。

次年度は、2年間の遠隔授業の取り組みを振り返り、より良い授業の改革を目指し、多様な観点から深く省察することを心がける。2021年度の反省点を次年度に生かしたい。とくに、本科目は、難解というイメージがつきまとう理論科目なので、実践的科目よりも抵抗がある。その前提のもと、学生の学びへの関心が高まるようにより良い授業デザインを求めたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		教職実践演習（養護教諭）	10名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

この授業は、これまでの教職課程科目の履修を通して学んだことや養護実習において経験したことを振り返り、教員（養護教諭）として最低限必要な資質や能力が身についているかを確認し、各自の課題を知るところをねらいとする。

年が明けたら2月の看護師国家試験に集中できるように、授業は2コマ続けて行い、12月に終了した。1コマ目は講義で復習を行い、1コマ目は関連する事項について教育実習の体験を振り返り各自で考え、グループワークを経て、全体でディスカッションを行った。

アンケートの入力を行った現在及び将来養護教諭を目指す学生5名については、授業への参加意欲が高く、授業への取組の自己評価も授業評価も高かった。

一方、養護教諭を目指す可能性が低い学生たちの授業への取組に温度差が見られ、その温度差を埋める授業の在り方を模索しながら、ダブル免許を取得することの難しさを感じた。

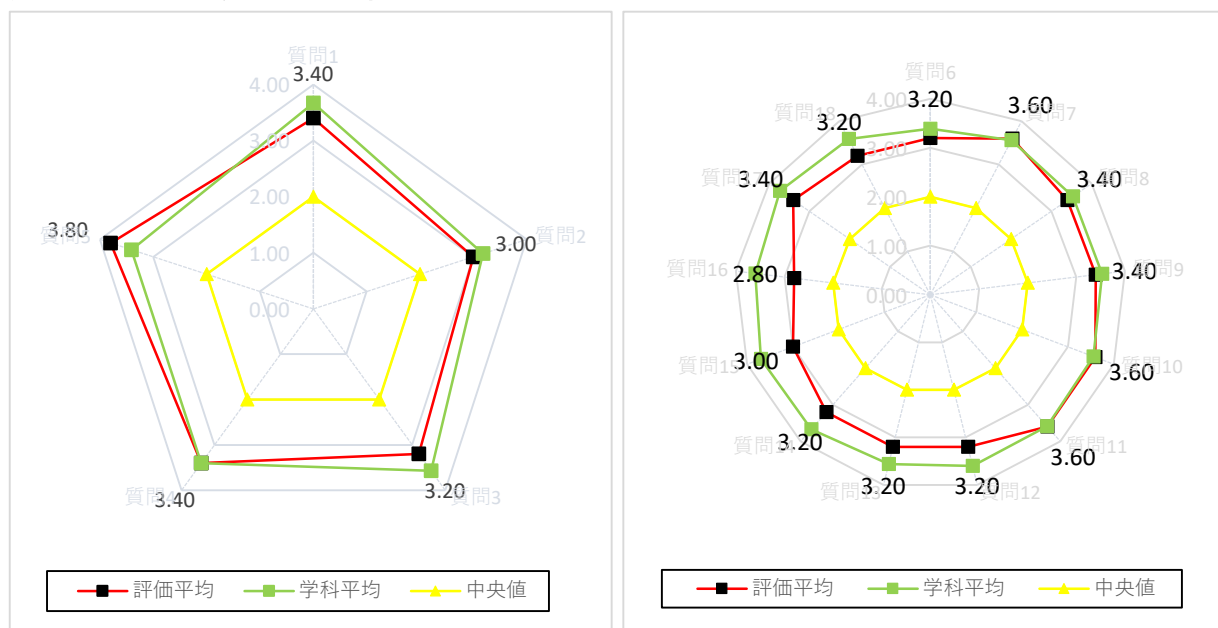
(3) 次年度に向けての取り組み

次年度も教員（養護教諭）としての使命感や情熱を持ち、学校保健の3領域の活動や養護教諭の職務を学校内外の人々と連携して行い、子どもたちの発達や成長を支えることができる養護教諭の育成を目指し、講義内容を精選し、演習を通して自ら考え、自分の課題を見つけていけるようにしていきたい。

また、現在も将来も養護教諭を目指さない学生にとって、学校保健を学んだ看護師としての位置づけも尊重しながら、授業を進めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		養護実習	10名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

今年度看護学科 I 期生は、教職課程履修生が10名であったが、新型コロナウイルス感染症の影響や想定外の教育実習校養護教諭の異動などがあり、前期は7名の学生が小学校2校と高等学校5校に分かれて「養護実習」を行った。3名後期に実習を行った学生の授業評価は含まれない。

「養護実習」では保健教育として、小学校では学級活動での保健指導の授業を、高等学校では教科保健の授業を担当させていただいた。いずれもプレ授業と研究授業を各1回行い、いずれかの授業参観をさせていただいたが、学生たちは多くの学びを得ることができたようだ（高等学校では複数の単元の授業を行う機会にも恵まれた）。各実習校の学級担任や保健体育科教諭の先生方には感謝申し上げたい。

また、保健室での活動においても、健康診断や救急処置、それに伴う個別や小集団での保健指導、健康相談、組織活動など保健管理や組織活動の多く体験することができ、学生たちの満足度は高かったようだ。各実習校で指導いただいた養護教諭とは巡回指導の際に情報交換をさせていただいたが、1学期の多忙な時期に快く実習をお引き受けいただき、感謝申し上げたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

養護実習においては、今後も「教育実習（養護実習）の手引」等を用いて実習校で指導いただく養護教諭と事前の打ち合わせをしっかりと行っていききたい。

また、3年生では学校保健関連の教職課程の授業がなく、2年生で学んだ学校保健に関する教科の学修記憶が曖昧になっている学生もいるので、養護実習事前指導も併せてしっかりと行っていききたい。

さらに、今後も養護実習中は複数回の巡回指導を行い、実習校の養護教諭と情報交換を行いながら学生の指導を行うと共に、学生から要望の高い研究授業の資料作りのアドバイス等も引き続き行い、実りある養護実習となるように支援していききたい。